耶蘇降生千八百八十四年　米國聖書會

舊約聖書 列王紀略下

明治十七年

日本横濱印行

02-KI
海老澤文庫

02-KI
2606

列王紀略下

第一章

一アハブの死しのちモアブイスラエルにそむけりニアハジヤサマリアにあるろの樓の欄杆よりおちて病とおこせしかば使を遣さんとして之にいひけるは往てエクロンの神バアルゼブブにわがこの病の愈るや否と問べしとヨ時にエホバの使テシベ人エリヤにいひけるゝ起てサマリア王の使にあひて之に言べし汝等がエクロンの神バアルゼブブに問んとてゆくゝイスラエルに神なきがゆゑなるかロ是によりてエホバかくいふ汝ゝその登りし牀より下ることなかるべし汝かならず死んとエリヤ乃ち往りヽ○ヨ使者たちアハジアに返りければアハジア彼等に何故に返りしやといふにホかれら之にいひけるゝ一箇の人上りきたりて我らに會ひわれらにいひけるゝ往てなんぢらを遣はせし王の所にかへり之にいふべしエホバ斯いひたまふなんぢエクロンの神

SAINT PAUL'S UNIVERSITY LIBRARY TOKYO
海老澤有道文庫

バアルゼブブに問んとて人を遣すいスラエルに神なきがゆゑなるか然ば汝その登りし牀より下ることなかるべし汝かならず死んとセアハジア彼等にいひけるはそののぼりきたりて汝等に會ひ此等の言を汝らに告たる人の形狀は如何なりしやハかれら對へていひけるはろれゝ毛深き人にして腰に革の帶をむすび居たり彼いひけるゝその人はテシベ人エリヤなりと九是に於て王五十人の長とその五十人をエリヤの所に遣はせり彼エリヤの所に上りゆくに視よエリヤは山の巔に坐し居たりかれエリヤにいひけるゝ神の人よ王いひたまふ下るべし十エリヤこたへて五十人の長にいひけるはわれもし神の人たらば火天より降りて汝と汝の五十人とを燒盡べしと火ずなはち天より降りてかれとその五十人とを燒盡せり十一アハジアまた他の五十人の長とその五十人をエリヤに遣せりかれ上りてエリヤにいひけるゝ神の人よ王

かく言たまふ速かに下るべし十二エリヤ答て彼にいひけるゝわれもし神の人たらば火天より降りて爾となんぢの五十人を燒盡すべしと神の火ずなゝち天より降りてかれとその五十人を燒盡せり十三かれまた第三の五十人の長とろの五十人を遣せり第三の五十人の長のぼりいたりてエリヤのまへに跪きこれに願ひていひけるゝ神の人よ願くゝわが生命となんぢの僕なるこの五十人の生命をなんぢの目に貴重き者と見なしたまへ十四視よ火天より降りて前の五十人の長二人とその五十人を燒盡せり然どわが生命とば汝の目に貴重き者となしたまへ十五時にエホバの使エリヤにいひけるゝかれとゝもに下れかれとおそるゝとなかれとエリヤすなゝち起てかれとゝもに下り王の許に至り十六之にいひけるゝエホバかくいひたまふ汝エクロンの神バアルゼブブに問んとて使者と遣るはイスラエルにその言と問ふべき神なきがゆゑなる

か是によりて汝ゐその登りし牀より下るとなかるべし汝かならず死んともかれエリヤの言たるエホバの言の如く死けるが彼に子なかりしかばヨラムこれに代りて王となれり是はユダの王ヨシアパテの子ヨラムの二年にあたる十八アハジヤのなしたる其餘の事業ゐイスラエルの王の歴代志の書に記載さるゝにあらずや

第二章　一エホバ大風ともてエリヤを天に昇らしめんとしたまふ時エリヤゐエリシヤとゝもにギルガルより出往りニエリヤエリシヤにいひけるゐ請ふこゝに止まれエホバわれをベテルに遣はしたまふなりとエリシヤいひけるゐエホバゐ活く汝の靈魂ゐ活く我なんぢをはなれじと彼等つひにベテルに下れり三ベテルに在る預言者の徒エリシヤの許に出きたりて之にいひけるゐエホバの今日なんぢの主となんぢの首の上よりとらんとしたまふを汝知やかれいふ然りわれ知り汝等默すべし四エリヤかれにいひけるゐエリシヤよ請ふ汝こゝに止れエホバわれをエリコに遣したまふなりとエリシヤいふエホバゐ活くなんぢの靈魂ゐ活く我なんぢを離じとかれらエリコにいたる五エリコに在る預言者の徒エリシヤに詣りて彼にいひけるゐエホバの今日なんぢの主をなんぢの首の上よりとらんとしたまふを汝知るやエリシヤ言ふ然り知り汝ら默すべしとゝエリヤまたかれにいひけるゐ請ふこゝに止れエホバわれをヨルダンにつかはしたまふなりとかれいふエホバゐ活くなんぢの靈魂ゐ活くヨれ汝をはなれじと二人進ゆくにも預言者の徒五十人ゆきて遙に立て望めり彼ら二人ゐヨルダンの濱に立けるがハエリヤろの外套をとりて之を卷き水をうちけるに此旁と彼旁にわかれたれば二人ゐ乾ける土の上とわたれりル渉りける時エリヤエリシヤにいひけるゐ我が取れてなんぢと離るゝ前に汝わが汝になすべきことを求めよエリシヤいひ

けるゝなんぢの靈の二の分の我にをらんことを願ふ＋エリヤいひけるゝ汝難き事を求む汝もしわが取れてなんぢを離るゝを見ばこの事なんぢにならんゑからずば此事なんぢにならじ十一彼ら進みながら語れる時火の車と火の馬あらはれて二人を隔てたりエリヤは大風にのりて天に昇れり十二エリシヤ見てわが父、わが父、イスラエルの兵車よその騎兵よと叫びしが再びかれを見ざりき是において十三エリシヤその衣をとらへて之を二片に裂き十四エリヤの身よりおちたるその外套をとりあげ返りてヨルダンの岸に立ち十五エリヤの身よりおちたる外套ととりて水をうちエリヤの神エホバいづくにいますやと言ひ而して己も水をうちけるに水此旁と彼旁に分れたればエリシヤすなはち渡れり十六エリコにある預言者の徒對岸にありて彼を見て言ひけるはエリヤの靈エリシヤの上にとゞまるとかれら來りてかれを迎へその前に地に伏て十七かれにいひけるゝ僕等に勇力者五十人あり請ふかれらをして往てなんぢの主を尋ねゑめよ恐くゝエホバの靈かれを曳あげてこれを或山か或谷に放ちしならんとエリシヤ遣すなかれと言けれども十八かれら彼の愧るまでに强ければすなはち遣せといへり是に於てかれら五十人の者を遣しけるが三日の間たづねたれども彼を看いださゝりしかば十九エリシヤの倘エリコに止れる時かれら返りてかれの許にいたりしにエリシヤかれらに言けるゝわれ往ことなかれと汝らにいひしにあらずやと○二十邑の人々エリシヤにいひけるゝ視よ吾主の見たまふごとく此邑の建る處ゝ善しされど水あしくしてこの地流產とおこす二十かれ言けるゝ新しき皿に鹽を盛て我に持ち來れよと乃ちもちきたりければ二十一彼いでゝ水の源に至り鹽と其處になげ入ていひけるゝエホバかくいひたまふわれこの水を愈す是處よりして重て死あるひゝ流產お

こちじと三其水すないちエリシヤのいひし如くに愈て今日にいたる○三かれろこよりベテルに上りしが上りて途にありけるとき小童等邑よりいでゝ彼と嘲り彼にむかひて禿首よのぼれ禿首よのぼれといひければ二四かれ回轉りてかれらをみエホバの名をもてかれらを呪詛ひければ林の中より二頭の牝熊出てろの兒子輩の中四十二人をさきたり二五かれ彼處よりサマリアにかへれり

第三章

一ユダの王ヨシヤパテの十八年にアハブの子ヨラムサマリアにありてイスラエルを治め十二年位にありき二かれはエホバの目のまへに惡をなせしかどもその父母の如くはあらざりきそゝ彼その父の造りしバアルの像を除きたればなり三されど彼はかのイスラエルに罪を犯させたるヂバテの子ヤラベアムの罪を行ひつづけて之をはなれざりき○四モアブの王メシヤゝ羊を有つ者にして十萬の羔と十萬の牡羊の毛とをイスラエルの王に納めとりしが五アハブの死しのちモアブの王はイスラエルの王にそむけり六是に於てヨラム王其時サマリアを出てイスラエル人とことゞく集めセまた往て人をユダの王ヨシヤパテに遣していはしむモアブの王われに背けり汝われとゝもにモアブに攻ゆくやと彼いひけるゝ我上らん我ゝ汝の如くわが民ゝなんぢの民のごとくまたわが馬ゝ汝の馬の如しとヨラムいひけるゝ我等いづれの路より上らんとかれいふエドムの曠野の途よりせんと七イスラエルの王すなはちユダの王およびエドムの王と共に出ゆきけるが行めぐること七日路にして軍勢とこれに玄たがふ家畜の飲むべき水なかりしかば八イスラエルの王いひけるゝ嗚呼、エホバこの三人の王とモアブの手に付たさんと召し集めたまへりと九ヨシヤパテいひけるゝ我らが由てエホバに問ふべきエホ

パの預言者此にあらざるやとイスラエルの王の臣僕の一人答へていふエリヤの手に水をそゝぎたるシヤパテの子エリシヤ此にあり十二ヨシヤパテいひけるハエホバの言彼にありとかくてイスラエルの王およびヨシヤパテとエドムの王かれの許に下りもきけるに十三エリシヤイスラエルの王に言けるハわれ汝と何の干與あらんや汝の父の預言者と汝の母の預言者の所にゆくべしとイスラエルの王かれにいひけるハ然ずろハエホバこの三人の王をモアブの手に付さんとて召集めたまへばなり十四エリシヤ言けるハわが事ふる萬軍のエホバハ活く我ユダの王ヨシヤパテのためにするにあらずばかならず汝を顧みず汝を見ざらんものを十五今樂人をわれにつれ來れと而して樂人の樂をなすにおよびてエホバの手かれに臨みて十六彼いひけるハエホバかくいひたまふ此谷に許多の溝を設けよ十七それエホバかく言ひたまふ汝ら風を見ず

雨をも見ざるに此谷に水盈て汝等と汝等の家畜および汝らの獸の飲ことを得ん十八然るも是ハエホバの目にハ瑣細き事なりエホバモアブ人をも汝らの手にわたしたまハん十九汝等ハ保障ある諸の邑と諸の美しき邑とを擊ち諸の佳樹を斫倒し諸の水の井を塞ぎ石ともて諸の善地を壞ふにいたらん二十かくて朝におよびて供物を獻ぐる時に水エドムの途より流れきたりて水國に充つ二十一偖またモアブ人ハみな王等の己に攻のぼれると聞しらば甲を着ることを得る以上の者を盡く集めてその境に備へしが二十二朝はやく興いでしに水の上に日昇りぬて對面の水血の如くに赤かりければモアブ人これを見て二十三いひけるハこれ乃はち血なり王たち戰ひて死たるならん互に相擊たるなるべし然ばモアブよ掠取に行けと二十四而してモアブ人イスラエルの陣營に至るにイスラエル人起てこれを擊たればすなはちその前より逃はしれり是においてイ

スラエル人進みてモアブ人を擊てその國にいり二五その邑々を擊
圮し各々石を諸の善地に投てこれに塡し水の井とことゞく塞
ぎ佳樹とことゞく斫たふし唯キルハラセテにその石をのこせ
しのみなるに至る但し石を投るもの周りあるきてこれを擊り二六
モアブ王戰鬪の手いたくして當りがたきを見て劍を拔く者七百
人をひきゐてエドム王の所にまで衝きいたらんとせしが遂に果
さゞりしかば二七己の位を繼べきその長子をとりてこれを石垣の
上にさゝげて燔祭となしたり是に於てイスラエルに大なる憤怒
おこりぬ彼等すなわちかれとすてゝその國に歸れり

第四章

一預言者の徒の妻の中なる一人の婦人エリシヤに呼はり
ていひけるゝ汝の僕なるわが夫死りなんぢの僕のエホバを畏れ
しことゝなんぢの知るところなり今債主きたりてわが二人の子
をとりて奴僕となさんとすと二エリシヤ之にいひけるゝわれな

んぢの爲に何をなすべきや汝の家に如何なる物あるかわれに告
よ彼いひけるゝ僅少の油のほかは汝の婢の家に有ものなし三彼
いひけるゝ往て外より隣の人々より器を借よ空たる器を借るべ
し少許を借るなかれ四而してなんぢ入て汝の子等とゝもに戸の
内に閉こもりそのすべての器に油をつぎてその盈るところの者
をとりのけおくべし五婦人すなはち彼を離れて去りその子等と
ゝもに戸の内に閉こもり子等のもちきたる器に油をつぎたり一
が六器のみな盈たるときその子にむかひ尙われに器をもちきた
れといひけるに器ゝもはやあらずといひたればその油すなはち
止る七是においてその婦神の人にいたりてかくと告ければかれ
いふ往て油をうりてその負債をつくのひその餘分をもて汝と汝
の子等生計をなすべしと八一日エリシヤシユチムにゆきしに
其所に一人の大なる婦人ありて去きりにこれに食をすゝめたれ

ば彼かしこを過る毎にそこに入て食をなせり九茲にその婦人夫に
にいひけるゝ視よ此つねにわれらを過る人ゝ我これを見るに神
の聖き人なり＋請ふ小き室を石垣の上につくりそこに臥床と案
と榻と燭臺をかれのために備へん彼われらに至る時はそこに入
るべしと十一かくてのちある日エリシヤそこに至りその室に入て
そこに臥たりしが十二その僕ゲハジにむかひ彼のシユナミ人を召
きたれといへり彼かの婦人を召たればろの前にきたりて立つに
十三エリシヤゲハジにいひけるゝ彼にかく言へ汝かく懇に我らの
ために意を用ふ汝のために何をなすべきや王または軍勢の長に
汝のことを告られんことを望むゝと彼答へてわれはわが民の中
にをるなりといふ十四エリシヤいひけるゝ然ばかれのために何と
なすべきやゲハジ答へけるゝ誠にかれは子なくその夫ゝ老たり
と十五是においてエリシヤかれを召といひければこれを呼に來たり

て戸口に立たれば十六エリシヤいふ明る年の今頃汝子を抱くあら
ん彼いひけるゝいなわが主神の人よなんぢの婢をあざむきたま
ふなかれと十七かくて婦つひに孕て明る年にいたりてエリシヤの
いへるその頃に子を生り十八ろの子育ちてある日刈穫人の所にい
でゆきてろの父にいたりしが十九父にわが首わが首といひたれば
父少者に彼を母のもとに負ゆけと言り二十すなゐちこれを負て母
にいたりしに午まで母の膝に坐り居て遂に死たれば二十一母のぼり
ゆきてこれを神の人の臥床の上に置きこれをとぢめて出で二十二
ろの夫をよびていひけるゝ請ふ一人の僕と一頭の驢馬を我につ
かわせ我神の人の許にはせゆきて歸らんと二十三夫いふ何故に汝は
今日かれにいたらんとするや今日は朔日にもあらず安息日にも
あらざるなり彼いひけるゝ宜しと二十四婦すなゐち驢馬に鞍おきて
その僕にいひけるゝ驅て進め吾が命ずることなくば我が騎すゝ

むることに緩漫あらしめざれと二五つひにカルメル山にゆきて神の人にいたるに神の人遙にかれの來るを見て僕ゲハジにいひけるゝ視よかしこにかのシユナミ人とる二六請ふ汝はしりゆきて彼をむかへて言へなんぢは平安なるやなんぢの夫はやすらかなるやなんぢの子はやすらかなるやと彼こたへて平安なりといひ二七遂に山にきたりて神の人にいたりその足を抱きたればゲハジこれを逐ひはらゝんとて近よりしに神の人いひけるゝ容しおけ彼ゝ心の中に苦あるなりまたエホバその事を我にかくしていまだわれに告たまゝざるなり二八婦いひけるゝわれわが主に子と求めしやわれをあざむきたまふなかれとわれゝ言ざりしや二九エリシヤすなゝちゲハジにいひけるゝなんぢ腰をひきからげわが杖を手にもちて行け誰に逢も禮となすべからず又なんぢに禮となす者あるともそれに答ふることなかれわが杖をかの子の面の上に

おけよと三〇その子の母いひけるゝエホバゝ活くなんぢの靈魂ゝ生く我ゝ汝と離れじと是ともてエリシヤつひに起て婦に從ひ行ぬ三一ゲハジゝかれらに先だちゆきて杖をかの子の面の上に置たるが聲もなく聞もせざりしかばかへりきたりてエリシヤに逢てこれに子いまだ目をさまさずと言ふ三二エリシヤこゝにおいて家に入て視に子ゝ死ておのれの臥床の上に臥てあれば三三すなはち入り戸をとぢて二人内にとりてエホバに祈り三四而してエリシヤ上りて子の上に伏し己が口をその口におのが目とその目に己が手をその手の上にあて身をもてその子を掩しに子の身體やうやく温まり來る三五かくしてエリシヤかへり來て家の内に其處此處をあゆみをり又のぼりて身ともて子をおほひ玄に子七度嚏して目をひらき玄かば三六ゲハジを呼てかのシユナミ人とよべと言ければすなはちこれを呼り三七彼入來りしかばエリシヤなんぢの子

を取ゆけと言りかれすなはち入りてエリシヤの足下に伏し地に身とかゝめて其子を取あげて出づ○三六斯てエリシヤまたギルガルにいたりしがろの地に饑饉あり預言者の徒その前に坐しとる是において彼その僕にいひけるゝ大なる釜をすゑて預言者の徒のために羹を煮よと三七時に一人田野にゆきて菜蔬を摘しが野籐のあるを見て其より野瓜を一風呂鋪摘きたりて羹の釜の中に截こみたり其ゝ皆それを知らざればなり四十斯てこれを盛て人々に食はせんとせしに彼等その羹を食はんとするにあたりて叫びて嗚呼、神の人よ釜の中に死をきたらする者ありといひて得食はざりしかば四一エリシヤさらば粉ともちきたれといひてこれを釜になげ入れ盛て人々に食しめよと言り釜の中にはすなはち害物あらずなりぬ○四二茲にバアルシヤリシヤより人來り初穂のパンと大麥のパン二十と圃の初物一袋とを神の人の許にもちいたりたればエリシヤ衆人にあたへて食はしめよと言ふに四三その奴僕いひけるゝ如何にとや我これを百人の前にそなふべきかと然るに彼また言ふ衆人にあたへて食しめよ夫エホバかくいひたまふかれら食ふて尚あます所あらんと四四すなゝち之をその前にそなへたればみな食ふてなほ餘せりエホバの言のごとし

第五章

一スリア王の軍勢の長ナアマンゝその主君のまへにありて大なる者にしてまた貴き者なりき是ゝエホバ曾て彼ともてスリヤに、拯救をほどこしたまひしが故なり彼ゝ大勇士なりしが癩病をわづらひ居るニ昔にスリア人隊と組ていでたりし時にイスラエルの地より一人の小女を執へゆけり彼ナアマンの妻に事たりしが三その女主にむかひわが主サマリアに居る預言者の前にいまさば善らん者をかれその癩病を痊すならんと言たれば四ナアマン入りてその主君に告てイスラエルの地よりきたれる女子

斯々語たれりと言ふに五スリア王いひけるい往よ往よ我イスラエルの王に書をおくるべしと是において彼いでゆき銀十タラントと金六千および衣服十襲をたづさへ六イスラエルの王にその書ともちゆけりその文に曰くこの書汝にいたらば視よ我わが臣ナアマンをなんぢに遣いせるなりこは汝にその癩病を痊されんがためなり七イスラエルの王ろの書を讀み衣を裂ていふ我神ならんや爭か殺すことをなし生すことをなしえん然るに此人なんぞ癩病の人を我につかわしてこれを痊さ玄めんとするや然ば請ふ汝等彼が如何に我に爭を求むるかと見て知れと八玆に神の人エリシヤイスラエルの王がその衣を裂たることをきゝ王に言遣しけるい汝何とて汝の衣をさきしや彼とわがもとにいたらしめよ然ば彼イスラエルに預言者のあるとと知にいたるべし九是においてナアマンその馬と車とを玄たがへ來りてエリシヤの家の門に立けるに十エリシヤ使をこれに遣して言ふ汝ゆきて身をヨルダンに七たび洗へ然ば汝の肉本にかへりて汝は清く爲べしと十一ナアマン怒りて去り言けるい我は彼かならず我もとにいできたりて立ちその神エホバの名を呼てその所の上に手を動して癩病を痊すならんと思へり十二ダマスコの河アバナとパルパルはイスラエルのすべての河水にまさるにあらずや我これらに身を洗ふて清まることを得ざらんやと乃ち身をめぐらし怒りて去る十三時にその僕等近よりてこれにいひけるい我父よ預言者なんぢに大なる事をなせと命ずるとも汝いそれと爲ざらんや況て彼なんぢに身を洗ひて清くなれといふとやと十四是においてナアマン下りゆきて神の人の言のごとくに七たびヨルダンに身を洗ひしにその肉本にかへり嬰兒の肉の如くになりて清くなりぬ十五かれすなはちその從者とゝもに神の人の許にかへりきたりてその前に

立ていふ我いまイスラエルのほうは全地に神なしと知る然ば請ふ僕より禮物をうけよ十六エリシヤいひけるゝわが事ふまつるエホバは活く肯て禮物をうけじとかれ強て之を受しめんとしたれども遂にこれを辭したり十七ナアマンいひけるゝ然ば請ふ騾馬に二駄の土を僕にとらせよ僕ゝ今よりのち他の神にゝ燔祭とも祭品をもさゝげずして只エホバにのみ献げんとす十八ねがはくゝ主この事につきて僕をゆるしたまへ即ちわが主君リンモンの宮にいりそこにて崇拜となしてわが手に倚ることありまた我リンモンの宮にありて身をかゞむる時に願くゝエホバその事につきて僕をゆるしたまへと十九エリシヤ彼になんぢ安じて去れといひければ彼エリシヤとはなれて少しく進みゆきけるに二十神の人エリシヤの僕ゲハジいひけるゝ吾が主人ゝ此スリア人ナアマンをいたはりて彼が手に携へきたれるものを受ざりしがエホバゝ活くわれ彼のあとを追かけて彼より少く物をとらんと二一ゲハジすなゝちナアマンのあとをおひ行くにナアマンはおのれのあとに走り來る者あるを見て車より下りこれを迎へて皆平安やと言ふに二二かれ言けるゝ皆平安しわが主我を遣していはしむ只今エフライムの山より預言者の徒なる二人の少者わが許に來れり請ふ汝かれらに銀一タラントと衣二襲とあたへよと二三ナアマンいひけるゝ望むらくゝ二タラントを取れとてかれを強ひ銀二タラントを二の袋にいれ衣二襲を添て二人の僕に負せたれば彼等これをゲハジの前に負きたりしが二四彼岡に至りしとき之をかれらの手より取て室のうちにをさめかれらを放ちて去しめ二五而して入てその主人のまへに立つにエリシヤこれにいひけるゝゲハジよ何處より來りしや答へていふ僕ゝ何處にもゆかず二六エリシヤいひけるゝその人

が車とはなれ來りてなんぢを迎へし時にわが心其處にあらざりしや今い金とうけ衣とうけ橄欖園葡萄園羊牛僕婢をうくべき時ならんや　二七　然ばナアマンの癩病いなんぢにつき汝の子孫におよびて限なからんと彼その前より退ぞくに癩病發して雪のごとくになりぬ

第六章　一　茲に預言者の徒エリシヤに言けるは視よ我等が汝と丶もに住ふ所はわれらのために隘し　二　請ふ我等を去てヨルダンに往ゑめよ我等おの〳〵彼處より一の材木と取て其處に我等の住べき處を設けんエリシヤ往よと言ふ　三　時にその一人希は汝も僕等と共に往けと言ければエリシヤ答へて我ゆかんと言ふ　四　エリシヤかく彼等と丶もに往り彼等ずないちヨルダンにいたりて樹を砍りたふゑけるが　五　一人の材木を砍たふすに方りてその斧水におちいりゑかば叫びて嗚呼主よ是は乞得たる者なりと言ふ　六　神の人其い何處におちいりゑやと言ふにその處をゑらせゑかば則ち枝を切おとして其處に投いれてその斧を浮まゑめ　七　汝これを取れと言ければその人手を伸てこれを取り　○　八　茲にスリアの王イスラエルと戰ひとりその臣僕と評議ゑて斯〻の處に我陣を張んと言たれば　九　神の人イスラエルの王に言おくりけるは汝愼んで某の處を過るなかれ其いスリア人其處に下ればなりと　十　イスラエルの王是において神の人が己に告げ己に教たる處に人を遣して其處に自防しこと一二回に止まらざりき　十一　是ともてスリアの王是事のために心となやまーその臣僕を召て我等の中誰がイスラエルの王と通じをるかを我に告ざるやと言ふに　十二　その臣僕の一人言ふ王わが主よ然るにあらず但イスラエルの預言者エリシヤ汝が寢室にて語る所の言語をもイスラエルの王に告るなり　十三　王いひけるは往て彼が安に居かを見よ我人をやりてこれを

執へんと茲に彼はドタンに居ると王に告ていふ者ありければ十四王ろこに馬と車および大軍とつかはせり彼等すなはち夜の中に來りてその邑を取かこみけるが十五神の人の從屬夙に興て出て見に軍勢馬と車をもて邑を取かこみ居ればその少者エリシヤに言けるゝ嗚呼わが主よ我等如何にすべきや十六エリシヤ答へけるゝ懼るなかれ我等と丶もにある者ゝ彼らと丶もにある者よりも多しと十七エリシヤ祈りて願くゝエホバかれの目を開きて見させたまへと言ければエホバその少者の眼を開きたまへり彼すなゝち見るに火の馬と火の車山に盈てエリシヤの四面に在り十八スリア人エリシヤの所に下りいたれる時エリシヤエホバに祈りて言ふ願くゝ此人々をして目昏しめたまへと即ちエリシヤの言のごとくにその目を昏ましめたまへり十九是においてエリシヤ彼らに言けるゝ是ゝその途にあらず是ゝその城にもあらず我に從ひて來れ我汝らを汝らが尋ぬる人の所に携ゆかんとて彼等をサマリアにひき至れり二十彼等がサマリアに至りし時エリシヤ言けるゝエホバよ此人々の目をひらきて見させたまへと即ちエホバかれらの目を開きたまひたれば彼等見るにその身ゝサマリアの中にあり二十一イスラエルの王かれらと見てエリシヤに言けるゝわが父よ我撃殺すべきや撃殺すべきや二十二エリシヤ答けるゝ撃殺すべからず汝劍と弓ともて擄にせる者等を撃殺すことと爲んやパンと水を彼らの前にそなへて食飲せしめてその主君に往しむべきなり二十三王すなゝちかれらの爲に大なる饗宴とまうけ其食飲をとはるに及びてこれを去去めたればすなゝち其主君に歸れり是をもてスリアの兵ふたゝびイスラエルの地に入ざりき○二十四此後スリアの王ベヂハダデろの全軍と集めて上りきたりてサマリアと攻圍みければ二十五サマリア大に糧食に乏しくなれり即ちかれら之を攻

かてみたれば遂に驢馬の頭一箇は銀八十枚にいたり鳩の糞一カブの四分の一は銀五枚にいたる二六 茲にイスラエルの王石垣の上を通りをる時一人の婦人かれに呼ばりて我主王よ助けたまへと言ければ二七 彼言ふエホバもし汝を助けたまはずば我何をもてか汝を助くることを得ん禾場の物ともてせんか酒醡の中の物ともてせんか二八 王すなはち婦に何事なるやと言ば答へて言ふ此婦人我にむかひ汝の子と與へよ我等今日これを食ひて明日は我が子を食ふべしと言り二九 斯われら吾子を煮てこれを食ひけるが我次の日にいたりて彼にむかひ汝の子を與へよ我等これを食はんと言ひしに彼その子を隠匿たり三〇 王その婦人の言と聞て衣を裂き而して石垣の上を通りをりしが民これを見るにその膚に麻布を着居たり三一 王言けるは今日シヤパテの子エリシヤの首その身の上にすゑりとらば神われに斯なしまた重ねてかく成たまへ三二 時にエリシヤはその家に坐しをり長老等これと共に坐し居る王すなはち己の所より人を遣りけるがエリシヤはその使者の未だ己にいたらざる前に長老等に言ふ汝等この人を殺す者の子が我の首をとらんとて人を遣はすと見るや汝等觀てその使者至らば戸を閉てこれと戸の内にいるゝなかれ彼の主君の足音その後にするにあらずやと三三 斯彼等と語をる間にその使者かれの許に來りしが王もつゞいて來り言けるは此災はエホバより出たるなり我なんぞ此上エホバを待べけんや

第七章

一 エリシヤ言けるは汝らエホバの言を聽けエホバかく言たまふ明日の今頃サマリアの門にて麥粉一セアを一シケルに賣り大麥二セアを一シケルに賣にいたらん二 時に一人の大將すなはち王のその手に依る者神の人に答へて言けるは由やエホバ天に窓をひらきたまふも此事あるべけんやエリシヤいひけるは汝

い汝の目をもて之を見んそれを食ふことはあらじ三茲に城邑の門の入口に四人の癩病人をり玄が互に言ひけるは我等なんぞ此に坐して死るを待べけんや四我ら若邑にいらんと言へば邑には食物竭てあれば我ら其處に死んもし又此に坐しをらば同く死んそれば我等ゆきてスリアの軍勢の所にいたらん彼ら我らを生しかば我等生ん若われらを殺すも死るのみなりと五スリア人の陣營にいたらんとて黄昏に起あがり玄がスリアの陣營の邊にいたりて視に一人も其處にをる者なしハ是より先に主スリアの軍勢を玄て車の聲、馬の聲、大軍の聲を聞玄めたまひしかば彼ら互に言けるは視よイスラエルの王われらに敵せんとてヘテ人の王等およびエジプトの王等を備ひきたりて我らを襲はんとすとセすなはち黄昏に起て逃げその天幕と馬と驢馬とを棄て陣營をその儘になしおき生命を全うせんとて逃たりハかの癩病人等陣營の邊に至りしが遂に一の天幕にいりて食飲し其處より金銀衣服を持さりて往てこれを隠し又きたりて他の天幕にいり其處よりも持さりて往てこれを隠せりルかくて彼等互に言けるは我等のなすところ善らず今日は好消息ある日なるに我等は默し居る若夜明まで等ば蓄害身におよばん然ば來れ往て王の眷屬に告んとナすなはち來りて邑の門を守る者を呼びこれに告て言けるは我等スリア人の陣營にいたりて視に其處には一人も居る者なく亦人の聲もせず但馬のみ繫ぎてあり驢馬のみ繫ぎてあり天幕は其儘なりと十一是において門を守る者呼ばりてこれを王の家の中に報せたれば十二王夜の中に興いでゝろの臣下に言けるは我スリア人が我等になせる所の如何を汝等に示さん彼等はわれらの飢たると知が故に陣營を去て野に隠る是はイスラエル人邑を出なば生擒て邑に推いらんと言て然せるなり十三その臣下の一人對

へて言けるは請ふ尚遺されて邑に存れる馬の中五匹を取しめよ我等人を遣て窺い玄めん視よ是等い邑の中に遺れるイスラエルの全群衆のごとし視よ是等い滅び亡たるイスラエルの全群衆のごとくなりと十四是において二輛の戰車とその馬を取り王すないち往て見よといひて人を遣いしてスリアの軍勢の跡を尾玄めたれば十五彼らその跡を尾てヨルダンにいたり玄が途にい凡てスリア人が狼狽して逃る時に棄たる衣服と器具盈りその使者かへりてこれを王に告ければ十六民いでゝスリア人の陣營を掠めたり斯、在玄かば麥粉一セアい一シケルとなり大麥二セアい一シケルと成るエホバの言のごとし十七爰に王その手に依ところの彼大將を立て門を司ら玄めたるに民門にて彼を蹂たれば死り即ち神の人が王のおのれに下り來し時に言たる言のごとし十八又神の人が王につげて明日の今頃サマリアの門にて大麥二セアを一シケルに賣り麥粉一セアを一シケルに賣にいたらんと言しごとくよ成ぬ十九彼大將その時よ神の人よこたへてエホバ天よ窓をひらきたまふも此事あるべけんやと言たり玄ゝバ答へて汝目をもてこれを見べけれどもこれを食ふことはあらじと言たりしゲ二十そのごとくよなりぬ即ち民門よてかれを蹂て死玄めたり

第八章

一エリシヤ嘗てその子を甦へらせて與へし婦よ言しことあり曰く汝起て汝の家族とゝもに往き汝の寄寓んとおもふ處よ寄寓れ其はエホバ饑、饉を呼くだしたまひたれバ七年の間この地よのぞむべけれバなりと二是をもて婦起て神の人の言のごとくよ爲しその家族とゝもよ往てペリシテ人の地よ七年寄寓ぬヨかくて七年を經て後婦人ペリシテ人の地より歸り玄ゲ自己の家と田畝のためよ王に呼もとめんとて往り四時よ王は神の人の僕ゲーハジよひろひ請ふエリシヤゲ爲し諸の大なる事等を我よ告よと

言てこれと談話をる∥即ち彼エリシヤが死人を甦らせしことを王にものがたりをる時よその子を彼が甦らせし婦自己の家と田畝のためよ王よ呼もとめければゲハジ言ふわが主王よ是そなハちその婦人なり是そなハちエリシヤが甦らせしその子なりヶ王そなハちその婦よ尋ねけるよこれを陳たれば王彼のために一人の官吏を派出して言ふ凡て彼れよ属そる物並よ彼がこの地を去し日より今よいたるまでの其田畝の産出物を悉く彼よ還せよと○エリシヤダマスコよ至れる事あり時よスリアの王ベヂハダデ病よかゝりをりしが人これよつげて神の人此よきたると言ふ者ありければ王ハザエルよ言ふ汝手よ禮物をとり往て神の人を迎へ彼よよりてエホバよ吾この病は愈るやと言て問へヶ是よおいてハザエルかれを迎へんとて出往きダマスコのもろ〳〵の佳物駱駝よ四拾駄を禮物よ携へて到りて彼の前よ立ち曰けるは汝の子スリアの王ベヂハダデ我を汝よつかはして吾この病は愈るやと言しむ∥エリシヤかれよ言けるは往てかれよ汝はらならを愈べーと告よ但しエホバかれはかならを死んと我よ去めしたまふなり十一而して神の人瞳子をさだめて彼の羞るまでよ見つめ乃て哭いでたれば十二ハザエルわが主よ何て哭たまふやと言ふよエリシヤ答へけるは我汝がイスラエルの子孫よなさんところの害悪を知ればなり即ち汝は彼等の城ふ火をかけ壯年の人を劍よころし子等を挫ぎ孕女を刳んで十三ハザエル言けるは汝の僕は犬なるら何ぞ斯る大なる事をなさんエリシヤ答へけるエホバ我よ去めしたまふ汝はスリアの王となるよいたらん十四斯て彼エリシヤを離れて去てその主君よいたるよエリシヤは汝よ何と言しやと尋ければ答へて彼汝はらならを愈るあらんと我よ告たりと言ふ十五翌日よいたりてハザエル粗き布をとりて水よ浸しこれをもて王の

面を覆ひたれば死りハザエルそなハち之よろハりて王となる○
十六イスラエルの王アハブの子ヨラムの五年よはヨシャパテ尙ユ
ダの王たりき此年よユダの王ヨシャパテの子ヨラム位よ即り十七
彼は位よ即し時三十二歲よして八年の間エルサレムにて世を治さ
めたり十八彼はアハブの家のなせるごとくよイスラエルの王等た
の道を行へりアハブの女かれの妻なりけれバなり斯彼はエホバ
の目の前よ惡をなせ去ども十九エホバその僕ダビデのためよユ
ダを滅そことを好みたまはざりき即ち彼よその子孫よりて恒
よ光明を與んと言たまひしごとし二十ヨラムの代よエドム叛き
てユダの手よ服せざ自ら王を立たれば二十一ヨラムその一切の戰車
を去たゞへてザイルに渉り去ゞ遂よ夜の中よ起わゞりて自己を
圍めるエドム人を擊ちその戰車の長等を擊り斯して民はその天
幕よ逃もきぬ二十二エドムは斯叛きてユダの手よ服せざなり去ゞ今
日まで然り此時よあたりてリブナもまた叛けり二十三ヨラムのその
餘の行爲およびその凡て爲たる事等はユダの王の歷代志の書よ
記さるゝよあらざや二十四ヨラムその先祖等とゝもよ寢りてダビデ
の邑よその先祖たちと同じく葬られその子アハジアこれよ代り
て王となれり二十五イスラエルの王アハブの子ヨラムの十二年よユ
ダの王ヨラムの子アハジア位よ即り二十六アハジアは位に即し時二
十二歲にしてエルサレムよて一年世を治めたりその母はイスラ
エルの王オムリの孫女に去て名をアタリヤといふ二十七アハジアは
アハブの家の道よあゆみアハブの家のごとくよエホバの目の前
よ惡をなせり是ゝれはアハブの家の壻なりけれバなり二十八茲よア
ハブの子ヨラム自身もきてスリアの王ハザエルとギレアデのラ
モテよ戰ひけるゞスリア人等ヨラムに傷を負せたり二十九是よ於て
ヨラム王はそのスリアの王ハザエルと戰ふよあたりてラマに於

てスリア人に負せられたるところの傷を療さんとてエズレルに歸れりユダの王ヨラムの子アハジアはアハブの子ヨラムが病をるをもてエズレルに下りて之を訪ふ

第九章

一 茲に預言者エリシヤ預言者の徒一人を呼てこれに言ふ汝腰をひきからげ此膏の瓶を手にとりてギレアデのラモテに往け二 而して汝かしこに到らばニムシの子なるヨシヤパテの子エヒウを其處に尋獲て内に入り彼をその兄弟の中より起さめて奥の間につれゆき三 膏の瓶をとりその首に灌ぎて言へエホバかく言たまふ我汝に膏をそゝぎてイスラエルの王となすと而して戸を開きて逃されよ止ること勿れ四 是において預言者の僕なるその少者ギレアデのラモテに往けるが五 到りて見るに軍勢の長等坐してをりければ將軍に我汝に告べき事ありと言ふにエヒウこたへて我等諸人の中の誰に向と言たれば將軍に汝に向と言ふ六 エヒウそなへち起て家にいりければ彼その首に膏をそゝぎて之に言ふイスラエルの神エホバかく言たまふ我汝に膏をそゝぎてエホバの民イスラエルの王となす七 汝はその主アハブの家を擊ほろぼすべし其によりて我エゼベルの僕なる預言者等の血とエホバの諸の僕等の血をイゼベルの身に報いん八 アハブの家は全く滅亡べしアハブに屬する男はイスラエルにありて繫がれたる者も繫がれざる者もともに之を絶べし九 我アハブの家をネバテの子ヤラベアムの家のごとくに爲しアヒヤの子バアシヤの家のごとくになさん十 エズレルの地において犬イゼベルを食ふべし亦これを葬るものあらじと而して戸を啓きて逃されり十一 かくてエヒウその主の臣僕等の許にいできたりたれば一人之に言ふ平安なるやこの狂る者何のためにか汝にきたりたるやエヒウこたへて汝等はかの人を知りまたその言ところを知なりと言ふに十二 彼等言けらく

謊なり其を我等よ告よと是よおいてエヒウ言けるは彼斯々我につげて言りエホバかく言たまふ我汝よ膏をそゝぎてイスラエルの王となそと十三彼等そなハち急ぎて各人その衣服をとりこれを階の上エヒウの下よ布き喇叭を吹てエヒウは王たりと言り十四ニムシの子なるヨシヤパテの子エヒウ斯ヨラムよ叛けり（ヨラムはイスラエルを盡くひきゐるてギレアデのラモテに於てスリアの王ハザエルを禦ぎたり去ゲ十五ヨラム王はそのスリアの王ハザエルと戰ふ時よスリア人よ負せられたるところれ傷を痊さんとてエズレルよ歸りてをる）エヒウ言けるは若なんぢらの心よかなはバ一人もこの邑より走いでゝこれをエズレルよ言ふ者なろら去めよと十六エヒウすないちエズレルをさして乘往りヨラムかしこよ臥をればなりまたユダの王アハジアはヨラムを訪よ下りてをる十七エズレルの戍樓よ一箇の守望者立をり去ゲエヒウの群衆のきたると見て我群衆を見るといひければヨラム言ふ一人と馬に乘て遣し其に會去めて平安なるやと言去めよと十八是において一人馬にて行てこれに會ひ王かく宣まふ平安なるやと言ふにエヒウ言けるは平安い汝の與るところならんや吾後にまハれと守望者また告て言ふ使者かれらの許に往たるが歸り來ずと十九是をもて再び人を馬にて遣去たればその人かれらに到りて王かく宣まふ何か變事あるやと言ふにエヒウ答て平安い汝の與るところならんや吾後にまハれと言ふ二十守望者また告て言ふ彼も彼等の所にまで到り去が歸り來ずその車を趨するはニムシの子エヒウが趨するに似、狂ふて趨らせ來る三是において二十一ヨラム車を整へよと言ひけるが車整ひたればイスラエルの王ヨラムとユダの王アハジアおの〳〵その車にて出たり即ちかれらエヒウにむかひて出きたりエズレル人ナボテの地にて之に會けるが三ヨラム、エヒウを

見てエヒウよ平安なるやといひたればエヒウこたへて汝の母イゼベルの姦淫と魔術と斯多かれば何の平安あらんやと云り三ヨラムすなわち手をめぐらして逃げアハジアにむかひ反逆なりアハジアよと言ふに二四エヒウ手に弓をひき玄ぼりてヨラムの肩の間を射たればその矢かれの心をいぬきて出で彼わ車の中に偃一玄づめり二五エヒウその將ビデカルに言けるわ彼をとりてエズレル人ナボテの地の中に投すてよ其わ汝憶ふべし嘗て我と汝と二人ともに乘て彼の父アハブに從へる時にエホバ斯かれの事を預言玄たまへり二六曰くエホバ言ふ誠に我昨日ナボテの血とその子等の血を見たりエホバ言ふ我この地において汝にむくゆることあらんと然ば彼をとりてその地になげすてゝエホバの言のごとくにせよ二七ユダの王アハジアはこれを視て園の家の途より逃ゆきけるがエヒウその後を追ひ彼をも車の中に擊ころせと言しかばイブレアムの邊なるグルの坂にてこれを擊たればメギドンまで逃ゆきて其處に死り二八その臣僕等すなわち之を車にのせてエルサレムにたづさへゆきダビデの邑においてかれの墓にその先祖等とおなじくこれを葬れり二九アハブの子ヨラムの十一年にアハジアはユダの王となりしなり三十斯てエヒウ、エズレルにきたりしかばイゼベル聞てその目を塗り髪をかざりて窓より望みけるが三一エヒウ門に入きたりたればろの主を弑せしジムリよ平安なるやと言り三二エヒウすなわち面をあげて窓にむかひ誰か我に與するものあるや誰かあるやと言けるに二三の寺人エヒウを望みたれば三三彼を投おとせと言りすなわち之を投おとしたればその血、牆と馬とにほとばしりつけりエヒウこれを踏とほれり三四斯て彼内にいりて食飲をなし而して言けるは往てかの詛はれし婦を見てこれを葬れ彼は王の女子なればなりと三五是ともて彼を葬らんとて

往て見るにその頭骨と足と掌とあり玄のみなりければ三六歸りて彼につぐるに彼言ふ是すないちエホバがろの僕なるテシベ人エリヤをもて告たまひし言なり云くエズレルの地において犬イゼベルの肉を食はん三七イゼベルの屍骸はエズレルの地に於て糞土のごとくに野の表にあるべし是をもて是はイゼベルなりと指て言ふこと能ざらん

第十章

一アハブサマリアに七十人の子あり茲にエヒウ書をしたためてサマリアにおくり邑の牧伯等と長老等とアハブの子等の師傅等とに傳へて云ふ二汝らの主の子等汝らとゝもにあり又汝等は車も馬も城もあり且武器もあれば此書汝らの許にいたらば三汝らの主の子等の中より最も優れる方正き者を選み出してその父の位に置て汝等の主の家のために戰へよ四彼ら大に恐れて言ふ二人の王等すでに彼に當ることを得ざり玄なれば我等いか

でか當ることを得んと五乃ち家宰、邑宰、長老、師傅等エヒウに言おくりけるは我等は汝の僕なり凡て汝が我等に命ずる事を爲ん我等は王と立ることを好まず汝の目に善と見ゆる所を爲せ六是において二エヒウ再度かれらに書をおくりて云ふ汝らもし我に與き我言に玄たがふならば汝らの主の子なる人々の首をとりて明日の今頃エズレルにきたりて吾許にいたれと當時王の子七十人はその師傅なる邑の貴人等とゝもに居るその書かれらに至りしかば彼等王の子等をとらへてその七十人をことゞく殺しその首を籃につめてこれをエズレルのエヒウの許につかはせりハすないち使者いたりてエヒウに告て人衆王の首をたづさへ來れりと言ければ明朝までそれを門の入口に二山に積おけと言りた朝におよび彼出て立ちすべての民に言ふ汝等は義し我はわが主にそむきて之を弑したり然ど此すべての者等を殺せしは誰なるぞや十

然ば汝等知れエホバがアハブの家につきて告たまひしエホバの言は一も地に隕ず即ちエホバはその僕エリヤによりて告し事を成たまへりと十一斯てエヒウはアハブの家に屬する者のエズレルに遺れると盡く殺しまたその一切の重立たる者、その親き者、およびその祭司等と殺して彼に屬する者と一人も遺さゝりき十二エヒウすなわち起て往てサマリアに至り去がエヒウ途にある時牧者の集會所において十三ユダの王アハジアの兄弟等に遭ひ汝等は何人なるやと言けるに我等はアハジアの兄弟なるが王の子等と王母の子等の安否と問んとて下るなりと答へたれば十四彼等を生擒れと言り即ちかれらを生擒りその集會所の穴の側にて彼等四十二人を盡く殺し一人とも遺ざりき十五斯てエヒウ其處より進みゆき去がレカブの子ヨナダブの己を迎にきたるに遭ければろの安否をとふてこれに汝の心はわが心の汝の心と同一なるがごとく

に眞實なるやと言けるにヨナダブ答へて眞實なりと言たれば然ば汝の手を我に伸よと言ひその手を伸ければ彼を挽て己の車に登らしめて十六言ふ我とゝもに來りて我がエホバに熱心なるを見よと斯かれを己の車に乘去め十七サマリアにいたりてアハブに屬する者のサマリアに遺れるを盡く殺して遂にろの一族を滅せりエホバのエリヤに告たまひし言語のごとし十八茲にエヒウ民をこゝに集てこれに言けるはアハブは少くバアルに事たるがエヒウは大いにこれに事へんとす十九然ば今バアルの諸の預言者諸の臣僕、諸の祭司等を我許に召せ一人も來らざる者なからしめよ我大なる祭祀をバアルのためになさんとするなり凡て來らざる者は生ておかじと但しエヒウバアルの僕等を滅さんとて僞りて斯なせるなり二十エヒウすなわちバアルの祭禮を設よと言ければ之を宣たり三是てエヒウあまねくイスラエルに人をつかはした

れればバアルの僕たる者皆きたれり一人も來らずして道れるものはあらざりき彼等バアルの家にいりたればバアルの家は末より末まで充われり　三　時にエヒウ衣裝を掌どる者にむかひ禮服をとりいだしてバアルの凡の僕等にあたへよといひければすなわち禮服をとりいだせり　四　斯ありてエヒウはレカブの子ヨナダブとともにバアルの家にいり去がバアルの僕等に言ふ汝等尋ね見て此にわ只バアルの僕のみあら去めエホバの僕と一人も汝らの中にあらしめざれと　五　彼等犧牲と燔祭を獻んとて入り時エヒウ八十人の者を外に置て言ふ凡てわがその手にわたすところの人を一人にても逃れしむる者わ己の生命ともてその人の生命に代べしと　六　斯て燔祭を獻ることの終りし時エヒウその士卒と諸將に言ふ入てかれらを殺せ一人をも出すなかれとすなわち刃ともて彼等を擊ころせり而して士卒と諸將これを投いだしてバアルの家の內殿に入り　七　諸の像をバアルの家よりとりいだしてこれを燒り　八　即ちかれらバアルの像をこぼちバアルの家をこぼち其をもて圊を造りしが今日までのこる　九　エヒウかくイスラエルの中よりバアルを絕さりたりしかども　十　エヒウわ倘かのイスラエルに罪を犯させたる子バテの子ヤラベアムの罪に離るゝことをせざりき　十一　即ち彼なほベテルとダンにあるところの金の犢に事たり　十二　エホバ、エヒウに言たまひけらく汝わが義と視るところの事を行ふにあたりて善く事をなしまたわが心にある諸の事をアハブの家になしたれば汝の子孫わ四代までイスラエルの位に坐せんと　十三　然るにエヒウわ心を盡してイスラエルの神エホバの律法とおこなわんとわせず倘かのイスラエルに罪を犯させたるヤラベアムの罪に離れざりき　十四　是時にあたりてエホバイスラエルを割くことを始めたまへりハザエルすなわちイスラエルの一切の

邊境と侵し三ヨルダンの東においてギレアデの全地ガド人、ルベン人、マナセ人の地と侵しアルノン河の邊なるアロエルよりギレアデにいたりバシヤンにおよべり三四エヒウのその餘の行爲とその凡て爲たる事およびその大なる能ハイスラエルの王の歷代志の書に記さるゝにあらずや三五エヒウその先祖等とゝもに寢りたればこれをサマリアに葬りぬその子エホアハズこれに代て王となれり三六エヒウがサマリアにをりてイスラエルに王たり玄間ハ二十八年なりき

第十一章

一茲にアハジアの母アタリアその子の死たるを見て起て王の種をことゝく滅したりしが二ヨラム王の女にしてアハジアの姉妹なるエホシバといふ者アハジアの子ヨアシを王の子等の殺さるゝ者の中より竊みとり彼とその乳母と夜着の室にいれて彼とアタリアに匿したれば終にころされざりき三ヨアシは

彼とゝもに六年エホバの家に隱れてをりアタリア國を治めたり四第七年にいたりエホヤダ人を遣して近衛兵の大將等を招きよせエホバの家にきたりて己に就しめ彼等と契約を結び彼らにエホバの家にて誓をなさしめて王の子を見せかれらに命じて言ふ汝等がなすべき事は是なり汝等安息日に入きたる者は三分の一は王の家をまもり六三分の一はスル門にをり三分の一ハ近衛兵の後の門にとるべし斯なんぢら宮殿をまもりて人をいるべからずせまた凡て汝等安息日に出ゆく者はその二手ともにエホバの家において王とまもるべしハすなはち汝らおの〳〵武器を手にとりて王を環て立べし凡てその列を侵す者とぱ殺すべし汝等又王の出る時にも入る時にも王とゝもにをるべし七是においてその將官等祭司エホヤダが凡て命せしごとくにおこなへり即ちかれらおの〳〵其手の人の安息日に入くべき者と安息日に出ゆ

くべき者とを率て祭司ヱホヤダに至りしかば＋祭司ハヱホヤダの殿にあるダビデ王の槍と楯を大將等にわたせり十一近衛兵ハおの〳〵手に武器をとりて王の四周にをり殿の右の端より左の端におよびて壇と殿にそひて立つ十二ヱホヤダすなハち王子を進ませて之に冠冕をいたゞかせ律法をわたし之を王となして之に膏をそゝぎければ人衆手を拍て王長壽かれと言り十三茲にアタリヤ近衛兵と民の聲を聞きヱホヤダの殿にいりて民の所にいたり十四見るに王ハ常例のごとくに高座の上に立ち其傍に大將等と喇叭手立をり又國の民みな喜びて喇叭を吹をりしかばアタリヤその衣を裂て反逆なり反逆なりと叫べり十五時に祭司ヱホヤダ大將等と軍勢の士官等に命じてこれに言ふ彼をして列の間をとほりて出しめよ彼に從がふ者をば劍をもて殺せと前にも祭司は彼をヱホヤダの家に殺すべからずと言おけり十六是をもて彼のために路をひらきければ彼王の家の馬道をとほりゆきしが遂に其處に殺されぬ十七斯てヱホヤダはヱホヤダと王と民の間にその皆ヱホヤダの民とならんといふ契約を立しめたり亦王と民の間にもこれを立しめたり十八是をもて國の民みなバアルの家にいりてこれを毀ちその壇とその像を全く打碎きバアルの祭司マッタンをその壇の前に殺せり而して祭司ヱホヤダの家に監督者を設けたり十九ヱホヤダすなはち大將等と近衛兵と國の諸の民を率てヱホヤダの家より王をみちびき下り近衛兵の門の途よりして王の家にいたり王の位に坐せしめたり二十斯有しかば國の民はみな喜びて邑は平穩なりきアタリヤは王の家に殺されぬ二十一ヨアシは位に即し時七歲なりき

第十二章

一ヨアシはヱヒウの七年に位に即きエルサレムにおいて四十年世を治めたりその母ハベエルシバより出たるものにて名をヤビアといへり二ヨアシハ祭司ヱホヤダの己を誨ふる間ハ

恒にエホバの善と視たまふ事をおこなへり三然ど崇邱ハ除かず
してあり民ハ尙その崇邱において犧牲をさゝげ香を焚り四茲に
ヨアシ祭司等に言けるハ凡てエホバの家に聖別て献、納るところ
の金即ハち核數らるゝ人の金、估價にーたがひて出ところの身の
代の金および人々が心より願てエホバの家に持きたるところの
金五これを祭司等おの〳〵その知人より受とさめ何處にても殿
に破壞の見る時ハこれともてその破壞を修繕ふべしと六然るに
ヨアシ王の二十三年におよぶまで祭司等殿の破壞を修繕ふにい
たらざりしかば七ヨアシ王祭司エホヤダおよびその他の祭司等
を召てこれに言ふ汝等などて殿の破壞を修繕ハざるや然ば今よ
りハ汝等の知人より金を受て自己のためにすべからず唯殿の破
壞の修理に其と供ふべーとハ祭司等ハ重て民より自己のために
金と受ず又殿の破壞と修理ふこととせじと約せり九斯て後祭司

エホヤダ一箇の匱をとりその蓋に孔を穿ちてこれをエホバの家
の入口の右において壇の傍に置り門守の祭司等すなハちエホバ
の家に入きたるところの金とこと〳〵くその中に入たり十爰に
その匱の中に金の多くあることを見たれば王の書記と祭司長と
上り來りてそのエホバの家に積りー金と包みてこれを數へ十一そ
の數へー金とこの工事をなす者に付せり即ちエホバの家の監督
者にこれを付しければ彼等またエホバの家を修理ふところの木
匠と建築師にこれを與へ十二石工および琢石者に與へまたこれを
もてエホバの家の破壞と修繕ふ材木と琢石と買ひ殿を修理ふた
めに用ふる諸〻の物のためにこれを費せり十三但ーエホバの家にい
り來れるその金をもてエホバの家のために銀の盂、燈剪、鉢、喇叭、金
の器、銀の器等を造ることハせざりき十四唯これとその工事となす
者にわたして之ともてエホバの家を修理ハしめたり十五またその

金を手にわたして工人にはらはしめたる人々と計算をなすなとせざりき是は彼等忠厚に事をなしたればなり十六徳金と罪金はエホバの家にいらずして祭司に歸せり○十七當時スリアの王ハザエルのぼり來りてガテと攻てこれを取り而してハザエルエルサレムに攻のぼらんとてその面をこれに向たり十八是をもてユダの王ヨアシその先祖たるユダの王ヨシヤパテ、ヨラム、アハジア等が聖別て献げたる一切の物および自己が聖別て献げたる物ならびにエホバの家の庫と王の家とにあるところの金を悉く取てこれをスリアの王ハザエルにおくりければ彼すなはちエルサレムを離れて去ぬ十九ヨアシのその餘の行爲およびその凡て爲たる事はユダの王の歴代志の書に記さるゝにあらずや二十茲にヨアシの臣僕等おこりて黨をむすびシラに下るところのミロの家にてヨアシを弑せり二十一即ちその僕シメアテの子ヨザカルとショメルの子ヨザバデゥれと弑して死しめたればその先祖とおなじくこれをダビデの邑に葬れりその子アマジヤこれに代りて王となる

第十三章

一ユダの王アハジアの子ヨアシの二十三年にエヒウの子ヨアハズサマリアにおいてイスラエルの王となり十七年位にありき二彼はエホバの目の前に惡をなし夫のイスラエルに罪を犯させたるヤバテの子ヤラベアムの罪を行ひつゝけて之に離れざりき三是においてエホバイスラエルにむかひて怒を發してこれとその代のあひだ恒にスリアの王ハザエルの手にわたしおき又ハザエルの子ベヂハダデの手に付し置たまひしが四ヨアハズエホバに請求めたればエホバつひにこれと聽いれたまへり其はイスラエルの苦難を見そなはしたればなり即ちスリアの王これをなやませるなり五エホバつひに救者とイスラエルにたまひたればイスラエルの子孫はスリア人の手を脱れて疇昔のごとくに己

己の天幕に住にいたれりゝ但し彼等はイスラエルに罪を犯さしめたるヤラベアムの家の罪をはなれずして之をおこなひつゞけたりサマリアにも亦アシタロテの像たちをりぬ七　嚮にスリアの王は民を滅し踐くだく塵のごとくに是となして只騎兵五十人、車十輛、歩兵一萬人而已とヨアハズに遺せり八　ヨアハズのその餘の行爲とその凡て爲たる事およびその能はイスラエルの王の歴代志の書にしるさるゝに非ずや九　ヨアハズはその先祖等とゝもに寢りたればこれをサマリアに葬れりその子ヨアシこれに代て王となる○十　ユダの王ヨアシの三十七年にヨアハズの子ヨアシサマリアにおいてイスラエルの王となり十六年位にありき十一　彼エホバの目の前に惡となし夫のイスラエルに罪を犯させたるヤラベアムの諸の罪にはなれずしてこれを行ひつゞけたり十二　ヨアシのその餘の行爲とその凡て爲たる事およびそのユダの王アマジヤと戰ひし能はイスラエルの王の歴代志の書に記さるるに非ずや十三　ヨアシその先祖等とゝもに寢りてヤラベアム位にのぼれりヨアシはイスラエルの王等とおなじくサマリアに葬らる○十四　茲にエリシヤ死病にかゝりて疾をりしかばイスラエルの王ヨアシ彼の許にくだり來てその面の上に涙をこぼし吾父、吾父、イスラエルの兵車よその騎兵よと言り十五　エリシヤかれにむかひ弓矢をとれと言ければすなはち弓矢をとれり十六　エリシヤ、またイスラエルの王に汝の手を弓にかけよと言ければすなはちその手をかけたり是においてエリシヤその手を王の手の上に按てもて東向の窓を開と言たれば之を開きけるにエリシヤまた射よと言り彼すなはち射たればエリシヤ言ふエホバよりの拯救の矢スリアに對する拯救の矢、汝かならずアペクにおいてスリア人を擊やぶりてこれを滅しつくすにいたらん十七　エリシヤまた矢を取れと言

ければ取りエリシヤまたイスラエルの王に地を射よといひけるに三次射て止たれば九神の人怒て言ふ汝ゝ五回も六回も射るべかりしなり然せしならば汝スリアを擊やぶりて之と滅しつくすことを得ん然ど今然せざれば汝がスリアを擊やぶることゝ三次のみなるべしと二十エリシヤ終に死たればこれを葬りしが年の立かへるに及てモアブの賊黨國にいりきたれり二十一時に一箇の人を葬らんとする者ありしが賊黨を見たればその人をエリシヤの墓におしいれけるにその人いりてエリシヤの骨にふるゝや生かへりて起あがれり○二十二スリアの王ハザエルゝヨアハズの一生の間イスラエルをなやましたりしが二十三エホバそのアブラハムイサク、ヤコブと契約をむすびしがためにイスラエルをめぐみ之を憐みこれを眷みたまひ之と滅すことを好まず倘これをその前より棄ばなちたまゝざりき二十四スリアの王ハザエルつひに死てその子ベ

子ハダデこれに代りて王となれり二十五是においてヨアハズの子ヨアシゝその父ヨアハズがハザエルに攻取れたる邑々をハザエルの子ベ子ハダデの手より取かへせり即ちヨアシゝ三次かれを敗りてイスラエルの邑々を取かへーぬ

第十四章

一イスラエルの王ヨアハズの子ヨアシの二年にユダの王ヨアシの子アマジヤ王となれり二彼ゝ王となれる時二十五歳にして二十九年の間エルサレムにて世を治めたりその母ゝエルサレムの者にして名をエホアダンと云り三アマジヤゝエホバの善と見たまふ事をなしたりしがその先祖ダビデのごとくゝあらざりき彼ゝ萬の事において其父ヨアシがなせしごとくに事となせり四惟崇邱ゝのぞかずしてあり民ゝなほその崇邱において犧牲をさゝげ香を焚り五彼ゝ國のその手に堅くたつにおよびてその父王を弑せし臣僕等を殺したりしが六その弑殺人の子女等ゝ

殺さゞりき是ハモーセの律法の書に記されたる所にしたがへるなり即ちエホバ命じて言たまハく子女の故によりて父を殺すべからず父の故によりて子女を殺すべからず人ハみなその身の罪によりて死べき者なりと　七アマジヤまた鹽谷においてエドム人一萬を殺せり亦セラを攻とりてその名をヨクテルとなづけしが今日まで然り　八かくてアマジヤ使者をエヒウの子ヨアハズの子なるイスラエルの王ヨアシにおくりて來れ我等たがひに面をあわせんと言しめければ　九イスラエルの王ヨアシユダの王アマジヤに言おくりけるはレバノンの荊棘かつてレバノンの檜樹に汝の女子をわが子の妻にあたへよと言おくりたることありしにレバノンの野獸とはりてその荊棘を踏たふせり　十汝は大にエドムに勝たれば心に誇る、その榮譽にやすんじて家に居れなんぞ禍を惹おこして自己もユダもともに亡んとするやと　十一然るにアマジヤ聽ことをせざりしかばイスラエルの王ヨアシのぼり來れり是において彼とユダの王アマジヤはユダのベテシメシにてたがひに面とわせたりしが　十二ユダイスラエルに敗られて各人その天幕に逃かへりぬ　十三是においてイスラエルの王ヨアシはアハジアの子ヨアシの子なるユダの王アマジヤとベテシメシに擒へ而してエルサレムにいたりてエルサレムの石垣をエフライムの門より隅の門まで凡そ四百キユビトを毀ち　十四またエホバの家と王の家の庫とにあるところの金銀および諸の器をとりかつ人質をとりてサマリアにかへれり　十五ヨアシがなしたるその餘の行爲とその能およびそのイスラエルの王アマジヤと戰ひし事ハイスラエルの王の歷代志の書にしるさるゝにあらずや　十六ヨアシその先祖等とゝもに寢りてイスラエルの王等とゝもにサマリアに葬られその子ヤラベアムこれに代りて王となれり　十七ヨアシの子なる

ユダの王アマジヤハヨアハズの子なるイスラエルの王ヨアシの死てより後なほ十五年生存へたり十六アマジヤのその餘の行爲ハユダの王の歴代志の書にしるさるゝにあらずや十七茲にエルサレムにおいて黨をむすびて彼に敵する者ありければ彼ラキシに逃ゆきけるにその人々ラキシに人をやりて彼を彼處に殺さしめたり二十人乘かれと馬に負せてもちきたりエルサレムにおいてれとその先祖等とゝもにダビデの邑に葬りぬ二十一ユダの民みなアザリヤをとりて王となしてその父アマジヤに代しめたり時に年十六なりき二十二彼エラテの邑を建てこれを再びユダに歸せしめたり是ハかの王がその先祖等とともに寢りし後なりき○二十三ユダの王ヨアシの子アマジヤの十五年にイスラエルの王ヨアシの子ヤラベアムサマリアにおいて王となり四十一年位にありき二十四彼ハエホバの目の前に惡をなし夫のイスラエルに罪を犯さしめたるネバテの子ヤラベアムの罪に離れざりき二十五彼ハマテの入處よりアラバの海までイスラエルの邊境を恢復せりイスラエルの神エホバがガテヘペルのアミッタイの子なるその僕預言者ヨナによりて言たまひし言のごとし二十六エホバイスラエルの艱難を見たまふに其ハ甚だ苦かり即ち繫れたる者もあらず繫れざる者もあらず又イスラエルを助る者もあらず二十七エホバは我イスラエルの名を天下に塗抹んとすと言たまひしことを無し反てヨアシの子ヤラベアムの手をもてこれを拯ひたまへり二十八ヤラベアムのその餘の行爲とその凡てなしたる事およびその戰爭となせし能その昔にユダに屬し居たることありしダマスコとハマテを再びイスラエルに歸せしめたる事ハイスラエルの王の歴代志の書に記るゝにあらずや二十九ヤラベアムその先祖たるイスラエルの王等とゝもに寢りその子ザカリヤこれに代りて王となれり

第十五章

一イスラエルの王ヤラベヤムの二十七年にユダの王アマツヤの子アザリヤ王となれり二彼ハ王となれる時に十六歳なりしが五十二年の間エルサレムにおいて世を治めたりその母ハエルサレムの者にして名をエコリアと言ふ三彼ハエホバの善と見たまふ事となし萬の事においてその父アマツヤがなしたるごとく行へり四惟崇邱ハ除かずしてあり民ハ尚その崇邱の上に犧牲をさゝげ香をたけり五エホバ王を擊たまひしかばその死る日まで癩病人となり別殿に居ぬその子ヨタム家の事を管理て國の民を審判り六アザリヤのその餘の行爲とその凡てなしたる事はユダの王の歴代志の書にしるさるゝにあらずや七アザリヤその先祖等とゝもに寢りたればこれをダビデの邑にその先祖等とゝもに葬れりその子ヨタムこれに代りて王となる○八ユダの王アザリヤの三十八年にヤラベアムの子ザカリアサマリアにおいてイスラエルの王となれりその間ハ六月九彼その先祖等のなせしごとくエホバの目の前に惡を爲し夫のイスラエルに罪を犯させたる子バテの子ヤラベアムの罪に離れざりき十茲にヤベシの子シヤルム黨をむすびて之に敵し民の前にてこれを擊て弑しこれに代りて王となれり十一ザカリヤのその餘の行爲ハイスラエルの王の歴代志の書に記さる十二エホバのエヒウに告たまひし言ハ是なり云く汝の子孫ハ四代までイスラエルの位に坐せんと果して然り十三ヤベシの子シヤルムハユダの王ウジヤの三十九年に王となりサマリアにおいて一月の間王たりき十四時にガデの子メナヘムテルザより上りてサマリアに來りヤベシの子シヤルムをサマリアに擊てこれを殺し之にかハりて王となれり十五シヤルムのその餘の行爲とその徒黨とむすびし事ハイスラエルの王の歴代志の書にしるさる十六その後メナヘムテルザよりいたりてテフサと

その中にあるところの者およびその四周の地と擊り即ちかれら己がために開くことをせざりしかばこれを擊てその中の孕婦をことごとく刳剔たり十七ユダの王アザリヤの三十九年にガデの子メナヘムイスラエルの王となりサマリアにおいて十年の間世を治めたり十八彼エホバの目の前に惡をなし彼のイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムの罪に生涯離れざりき十九茲にアッスリアの王プルその地に攻きたりければメナヘム銀一千タラントをプルにあたへたり是い彼をして己を助けしめ是によりて國を己の手に堅く立しめんとてなりき二十即ちメナヘムその銀をイスラエルの諸の大富者に課しその人々に各々銀五十シケルを出さしめてこれをアッスリアの王にあたへたり是をもてアッスリアの王い歸りゆきて國に止ることをせざりき二十一メナヘムのその餘の行爲とその凡てなしたる事いイスラエルの王の歷代志の書にしるさるゝにあらずや二十二メナヘムその先祖等とゝもに寢りろの子ペカヒヤこれに代て王となれり二十三メナヘムの子ペカヒヤはユダの王アザリヤの五十年にサマリアにおいてイスラエルの王となり二年のあひだ位にありき二十四彼エホバの目の前に惡をなし彼のイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムの罪に離ざりき二十五茲にその將官なるレマリヤの子ペカ黨とむすびて彼に敵しサマリアにおいて王の家の奧の室にこれと擊ころしアルゴブとアリエをもこれとゝもに殺せり時にギレアデ人五十人ペカとゝもにありきペカすないち彼ところしかれに代て王となれり二十六ペカヒヤのその餘の行爲とその凡て爲たる事いイスラエルの王の歷代志の書にしるさる二十七レマリヤの子ペカはユダの王アザリヤの五十二年にサマリアに於てイスラエルの王となり二十年位にありき二十八彼エホバの目の前に惡となし彼のイスラエ

ルに罪とをかさせたるネバテの子ヤラベアムの罪にはなれざりき二九イスラエルの王ペカの代にアッスリアの王テグラテピレセル來りてイヨン、アベルベテマアカ、ヤノア、ケデシ、ハゾルおよびギレアデならびにナフタリの全地ガリラヤを取りその人々をアッスリアに擄へうつせり三十茲にエラの子ホセアヤの子ペカに敵しこれを擊て殺しこれに代て王となれり是はウジヤの子ヨタムの二十年にあたれり三一ペカのろの餘の行爲とろの凡てなしたる事はイスラエルの王の歴代志の書にしるさる○三二レマリヤの子イスラエルの王ペカの二年にウジヤの子ユダの王ヨタム王となれり三三彼い王となれる時二十五歳なりしがエルサレムにて十六年世を治めたり母はザドクの女にして名をエルシヤといへり三四彼はエホバの目にかなふ事をなし凡てその父ウジヤのなしたるごとくにおこなへり三五惟崇邱は除かず尚てあり民なほその崇邱の上に犧牲をさゝげ香を焚り彼エホバの家の上の門を建たり三六ヨタムのその餘の行爲とその凡てなしたる事はユダの王の歴代志の書にしるさるゝにあらずや三七當時エホバスリアの王レヂンとレマリヤの子ペカをユダにせめきたらせたまへり三八ヨタムその先祖等とゝもに寢りてその父ダビデの邑にその先祖等とゝもに葬られその子アハズこれに代りて王となれり

第十六章

一レマリヤの子ペカの十七年にユダの王ヨタムの子アハズ王となれり二アハズは廿となれる時二十歳にしてエルサレムにおいて十六年世を治めたりしがその神エホバの善と見たまふ事をその父ダビデのごとくは行はざりき三彼はイスラエルの王等の道にあゆみまたその子に火の中を通らしめたり是はエホバがイスラエルの子孫の前より逐はらひたまひし異邦人のおこ

なふところの憎むべき事に去たがへるなり四彼は崇邱の上丘の上一切の青木の下に犧牲をさゝげ香をたけり五この頃スリアの王レヂンおよびレマリヤの子なるイスラエルの王ピカヒエルサレムにせめのぼりてアハズと圍みけるが勝ことを得ざりき六この時にあたりてスリアの王レヂン復エラテをスリアに歸せしめユダヤ人をエラテより逐いだせり而してスリア人エラテにきたりて其處に住み今日にいたるゼ是においてアハズ使者とアッスリアの王テグラテピレセルにつかいして言しめけるい我い汝の臣僕汝の子なりスリアの王とイスラエルの王と我に攻かゝりをれば請ふ上りきたりてかれらの手より我と救ひいだしたまへとハアハズすなわちエホバの家と王の家の庫とにあるところの銀と金とをとりこれと禮物としてアッスリアの王におくりしかばルアッスリアの王かれの請を容たりアッスリアの王すなわちダマスコに攻のぼりて之をとりその民をキルに擄うつしまたレヂンを殺せりヤかくてアハズはアッスリアの王テグラテピレセルに會んとてダマスコにゆきけるがダマスコにおいて一箇の祭壇を見たればアハズ王その祭壇の工作にしたがひて委くこれが圖と式樣を制へて祭司ウリヤにこれをおくれり十一是において祭司ウリヤはアハズ王がダマスコよりおくりたる所にてらして一箇の祭壇をつくりアハズ王がダマスコより來るまでにこれを作りおけり十二茲に王ダマスコより歸りてその祭壇と見壇にちかよりてこれに上り十三壇の上に燔祭と素祭を焚き澆祭をそゝぎ酬恩祭の血を灑げり十四彼またエホバの前なる銅の壇と家の前より移せり即ちこれをかの新き壇とエホバの家の間より移してかの壇の北の方に置たり十五而してアハズ王祭司ウリヤに命じて言ふ朝の燔祭夕の素祭および王の燔祭とその素祭ならびに國中の民の燔祭と

その素祭および灌祭はこの大なる壇の上に焚べし又この上に燔祭の牲の血と犧牲の物の血をすべて灑ぐべし彼の銅の壇の事いなは考ふるあらん十六祭司ウリヤすないちアハズ王のすべて命じたるごとくに祭なせり十七またアハズ王臺の邊と削りて洗盤とその上よりうつしまた海をその下なる銅の牛の上よりおろして石の座の上に置き十八また家に造りたる安息日用の遊廊および王の外の入口をアッスリヤの王のためにエホバの家の中に變じたり十九アハズのなしたるその餘の行爲はユダの王の歴代志の書に出るさるゝにあらずや二十アハズその先祖等とゝもに寢りてダビデの邑にその先祖等とゝもに葬られその子ヒゼキヤこれにかわりて王となれり

第十七章

一ユダの王アハズの十二年にエラの子ホセア王となりサマリアにおいて九年イスラエルを治めたり二彼エホバの目の前に惡をなせしがその前にありしイスラエルの王等のごとくはあらざりき三アッスリアの王シヤルマネセル攻のぼりたればホセアこれに臣服して貢を納たりしが四アッスリアの王つひにホセアの己に叛けるを見たり其は彼使者をエジプトの王ソにおくり且前に歳々なせしごとくに貢をアッスリア王に納ざりければなり五是においてアッスリアの王かれを禁錮して獄におけり六すなわちアッスリアの王せめ上りて國中を遍くゆきめぐりサマリアにのぼりゆきて三年が間これをせめ圍みたりしが六ホセヤの九年におよびてアッスリアの王つひにサマリアを取りイスラエルをアッスリアに擄へゆきてこれをハラとハボルとゴザン河の邊とメデアの邑々とにおきぬ七此事ありしはイスラエルの子孫己をエジプトの地より導きのぼりてエジプトの王パロの手を脱しめたるその神エホバに對て罪を犯し他の神々を敬ひ八エホバが

イスラエルの子孫の前より逐はらひたまひし異邦人の法度にあゆみ又イスラエルの王等の設けし法度にあゆみたるに因てなりイスラエルの子孫義からぬ事をもてその神エホバと掩ひかくしその邑々に崇邱をたてたり看守臺より城にいたるまで然りヰ彼等一切の高丘の上一切の青樹の下に偶像とアシラ像を立て十一エホバがかれらの前より移したまひし異邦人のなせしごとくにその崇邱に香を焚き又悪と行ひてエホバを怒らせたり十二エホバかれらに汝等これらの事を爲べからずと言おきたまひしに彼等偶像に事ふることを爲しなり十三エホバ諸〳〵の預言者諸の先見者によりてイスラエルとユダに見證をたて汝等翻へりて汝らの悪き道を離れわが誡命わが法度をまもり我が汝等の先祖等に命ぜまたわが僕なる預言者等によりて汝等に傳へし法に率由ふやうにせよと言たまへり十四然るに彼ら聽ことをせずしてその項を強くせり彼らの先祖等がその神エホバを信せずしてその項を強くしたるが如し十五彼等はエホバの法度と棄てエホバがその先祖等と結びたまひし契約を棄てまたその彼等に見證したまひし證言を棄て且虚妄物にしたがひて虚浮なりまたその周圍なる異邦人の跡をふめり是はエホバが是のごとくに事をなすべからずと彼らに命ト給ひし者なり十六彼等その神エホバの諸〳〵の誡命を遺て己のために二の牛の像を鑄なし又アシラ像を造り天の衆群を拜み且バアルに事へ十七またその子息息女に火の中を通らしめト筮および禁厭をなしエホバの目の前に悪を爲ことに身を委ねてその怒を惹起せり十八是をもてエホバ大にイスラエルを怒りこれをその前より除きたまひたればユダの支派のほかは遺れる者あし十九然るにユダもまたその神エホバの誡命を守ずしてイスラエルの立たる法度にあゆみたればニ十エホバイスラエルの苗裔をことごとく棄て

れを苦しめこれをその掠むる者の手に付して遂にこれとその前より打すてたまへり三すないちイスラエルとダビデの家より裂はなしたまひしかばイスラエル子パテの子ヤラベアムを王となせしにヤラベアムイスラエルとしてエホバにしたがふことを止しめてこれに大なる罪を犯さしめたりしが三イスラエルの子孫はヤラベアムのなせし諸の罪をおこなひつゝけてこれに離るゝことなかりければ三三遂にエホバその僕なる諸の預言者をもて言たまひしごとくにイスラエルとその前より除きたまへりイスラエルはすないちその國よりアッスリアにうつされて今日にいたる三四斯てアッスリアの王バビロン、クタ、アワハマテおよびセパルワイムより人をおくりてこれをイスラエルの子孫の代にサマリアの邑々に置ければその人々サマリアを有ちてその邑々に住しが三五その彼處に始て住る時には彼等エホバを敬ふことをせざりしかばエホバ獅子をかれらの中に送りたまひてその獅子かれら若干を殺せり三六是によりてアッスリアの王に告て言ふ汝が移てサマリアの邑々におきたまひしかの國々の民いこの地の神の道を知ざるが故にその神獅子をかれらの中におくりて獅子かれらを殺せり是い彼等その國の神の道を知ざるに因てなり三七アッスリアの王すないち命を下して言ふ汝等が彼處より曳きたりし祭司一人を彼處に携ゆけ即ち彼をして彼處にいたりて住しめその國の神の道とその人々に教へしめよと三八是に於てサマリアより移れし祭司一人きたりてベテルに住みエホバの敬ふべき事をかれらに教へたり三九その民いまた各々自分自分の神々を造りてそれとりのサマリア人が造りたる諸の崇邱に安置せり民みなその住る邑々において然なしぬ四十即ちバビロンの人々いスコテベノテを作りクタの人々いテルガルを作りハマテの人々いアシマを

作り三二アビ人ハコブハズとタルタクと作りセパルワイ人はその子女と火に焚てセパルワイムの神アドラメレクおよびアナンメレクに奉げたり三三かれら又エホバを敬ひ凡俗の民ともて崇邱の祭司となしたれば其人これがために崇邱の家々にて職務となせり三四斯その人々エホバを敬ひたりしが亦その携へ出され来國々の風俗に去たがひて自己自己の神々に事へたり三五今日にいたるまで彼等は前の習俗に去たがひて事をなしエホバをも敬はず彼らの法度をも例典をも行はず又エホバがイスラエルと名けたまひしヤコブの子孫に命じたまひし律法をも誡命とも行はざるなり三六昔エホバこれと契約をたてこれに命じて言たまひけらく汝等は他の神を敬ふべからずまたこれを拜みこれに事へこれに犧牲をさゝぐべからず三七只大なる能をもて腕を伸て汝等をエジプトの地より導き上りしエホバとのみ汝等敬ひこれを拜みこれに犧牲をさゝぐべし三八またその汝等のために錄したまへる法度と例典と律法と誡命を汝等謹みて恆に守るべし他の神々と敬ふべからず三九我が汝等とむすびし契約を汝等忘るべからず又他の神々と敬ふべからず四〇只汝らの神エホバを敬ふべし彼なんぢらをその諸の敵の手より救ひいださん四一然るに彼等は聽ことをせずしてなほ前の習俗にしたがひて事へ行へり四二偖この國々の民い斯エホバを敬ひまたその雕める像に事たりしがその子も孫も共に然りその先祖のなせしごとくに今日までも然なすなり

第十八章

一イスラエルの王エラの子ホセアの三年にユダの王アハズの子ヒゼキヤ王となれり二彼い王となれる時二十五歳にしてエルサレムにて二十九年世をさめたりその母いザカリヤの女にして名をアビといへり三ヒゼキヤいその父ダビデの凡てなせしごとくエホバの善と見たまふ事をなし四崇邱を除き偶像を

毀ちアシラ像を砍たふーモーセの造りし銅の蛇と打碎けりこの時までイスラエルの子孫その蛇にむかひて香を焚たればなり人々これをヂホシタン(銅物)を稱なせり五ヒゼキヤはイスラエルの神エホバと賴り是、もて彼の後にも彼の先にもユダの諸〻の王等の中に彼に如ものなかりき六即ち彼は固くエホバに身をよせてこれに從ふことをやめずエホバがモーセに命じたまひーその誡命を守れりセエホバ彼とゝもに在したれば彼いその往ところに凡て利達を得たり彼いアッスリアの王に叛きてこれに事へざりきハ彼ペリシテ人を擊敗りてガザにいたりその境に達し看守臺より城にまで及べりルヒゼキヤ王の四年すなわちイスラエルの王エラの子ホセアの七年にアッスリアの王シヤルマヂセルサマリアに攻のぼりてこれを圍みけるがヰ三年の後つひに之を取りサマリアの取れしいヒゼキヤの六年にーてイスラエルの王ホセヤの九年にあたるヰアッスリアの王イスラエルとアッスリアに擄へゆきてこれをハラとゴザン河の邊とメデアの邑〻におきぬ十二是い彼等その神エホバの言に遵いずその契約と破りエホバの僕モーセが凡て命じたる事をやぶりこれを聽ことも行ふこともせざるによりてなり十三ヒゼキヤ王の十四年にアッスリアの王セナケリブ攻のぼりてユダの諸〻の堅き邑を取ければ十四ユダの王ヒゼキヤ人をラキシにつかはしてアッスリアの王にいたらしめて言ふ我過てり我を離れて歸りたまへ汝が我に課しむる者い我これを爲べしとアッスリアの王すないち銀三百タラント金三十タラントとユダの王ヒゼキヤに課したり十五是においてヒゼキヤ、エホバの家と王の家の庫とにあるところの銀とことく彼に與へたり十六此時ユダの王ヒゼキヤまた己が金を着たりしエホバの宮の戸および柱を剝てこれをアッスリアの王に與へたり十七

アッスリアの王またタルタン、ラブサリスおよびラブシヤケをしてラキシより大軍をひきゐてエルサレムにむかひてヒゼキヤ王の所にいたらしめたればすないち上りてエルサレムにきたれり彼等則ち上り來り漂布場の大路に沿る上の池塘の水道の邊にいたりて立り十八而して彼等王を呼たればヒルキヤの子なる宮內卿エリアキム書記官セブナおよびアサフの子なる史官ヨアア出きたりて彼等に詣りけるに十九ラブシヤケこれに言けるは汝等ヒゼキヤに言べし大王アッスリアの王かく言たまふ此汝が賴むところの者は何ぞや二十汝戰爭をなすの謀計と勇力とを言も只これ口の先の言語たるのみ誰を恃みて我に叛くことをせしや二一視よ汝は折かゝれる葦の杖なるエジプトと賴む其は人の其に倚るあればすないちその手を刺とはすなりエジプトの王パロは凡てこれと賴む者に斯あるなり二二汝等あるひは我はわれらの神エホバを賴ひと我に言ん彼はヒゼキヤがろの崇邱と祭壇とを除きたる者にあらずやまた彼はユダとエルサレムに告て汝等はエルサレムに於てこの壇の前に禱拜となすべしと言去にあらずや二三然ば請ふわが主君アッスリアの王に約をなせ汝もし人と乘去むることを得ば我馬二千匹を汝にあたへん二四汝いかにしてか吾主君の諸臣の中の最も微き一將だにも退くることを得ん汝なんぞエジプトと賴みて兵車と騎兵とこれに仰がんとするや二五また我とても今エホバの旨によらずして此處を滅しに上れるならんやエホバ我に此處に攻のぼりてこれを滅せと言たり二六時にヒルキヤの子エリアキムおよびセブナとヨアア、ラブシヤケにいひけるは請ふスリアの語ともて僕等に語りたまへ我等これを識なり石垣の上にをる民の聞るところにてユダヤ語をもて我等に言談たまふなかれ二七ラブシヤケかれらに言ふわが君唯我を汝の主と汝とにつかはし

ーて此言をのべゑめたまふならんや亦石垣の上に坐する人々にも我と遣ーて彼等をして汝等とゝもに自己の便溺を食ひ且飲にいたらゑめんとゑたまふにあらずやと二八而してラブシヤケ起わがりユダヤ語とも大聲に呼はり言をいだーて曰けるは汝等大王アッスリアの王の言と聽け二九王かく言たまふ汝等ヒゼキヤに欺かるゝなゝれ彼は汝等をわが手より救ひいだすことゑざるなり三十ヒゼキヤがエホバかならず我らを救ひたまはん此邑はアッスリアの王の手に陷らじと言て汝らにエホバを賴ま云めんとするとも三一汝等ヒゼキヤの言と聽なかれアッスリアの王かく言たまふ汝等約をなして我に降れ而して各人おのれの葡萄の樹の果と食ひ各人おのれの無花果樹の果をくらひ各人おのれの井水を飲めよ三二我來りて汝等を一の國に攜ゆかん其は汝等の國のごとき國穀と酒のある地パンと葡萄園のある地油の出る橄欖と蜜のある地なり汝等は生ることを得ん死ることゑらじヒゼキヤエホバ我等を救ひたまいんと言て汝らと勸るともこれを聽なかれ三三國々の神の中孰かその國をアッスリアの王の手より救ひたりしや三四ハマテおよびアルパデの神々は何處にあるセパルワイム、ヘナおよびアワの神々は何處にあるやサマリアとわが手より救ひ出せし神々あるや三五國々の神の中にろの國をわが手より救ひいだせし者ありしや然ばエホバいかでかエルサレムとわが手より救ひいだすことを得んと三六然ども民は默ーて一言もこれに應へざりき其は王命じてこれに應ふるなかれと言おきたればなり三七かくてヒルキヤの子なる宮內卿エリアキム書記官セブナおよびアサの子なる史官ロアその衣をさきてヒゼキヤの許にいたりラブシヤケの言をこれに告たり

第十九章

一ヒゼキヤ王これを聞てろの衣と裂き麻布を身にまと

ひてエホバの家に入り宮内卿エリアキムと書記官セブナと祭司の中の長老等とに麻布と衣せてこれとアモツの子預言者イザヤに遣せり　三彼等イザヤに言けるハヒゼキヤかく言ふ今日ハ艱難の日懲罰の日打棄らるゝ日なり嬰孩すでに產門いたりて之を產いだす力なきなり　四ラブシヤケその主君なるアツスリアの王に差遣れて來り活る神を謗る、汝の神エホバあるひハ彼の言を聞たまはん而して汝の神エホバその聞る言語を責罰たまふこともあらん然ば汝この遺る者のために祈禱をたてまつれと　五ヒゼキヤ王の僕等すなはちイザヤの許にいたりければ　六イザヤかれらに言けるハ汝等の主君にかく言べしエホバかく言たまふアツスリアの王の臣僕等が我を謗るところの言を汝聞て懼るゝなかれ　七我かれの氣をうつして風聲を聞て己の國にかへるにいたらしめん我また彼をして自己の國に於て劍に斃れしむべしと　八偖また

ラブシヤケハ歸りゆきてアツスリアの王がリブナに戰爭となしをるところに至れり其ハ彼そのラキシを離れしを聞たればなり　九茲にアツスリアの王ハエテオピアの王テルハカ汝に攻きたると言ふを聞てまた使者をヒゼキヤにつかはして言しむ　十汝等ユダの王ヒゼキヤに告て言べし汝エルサレムハアツスリアの王の手に陷らじと言て汝が頼むところの神に欺かるゝなかれ　十一汝ハアツスリアの王等が萬の國々になしたるところの事を知る即ちこれを滅しつくせしなり然ば汝いかで救らんや　十二吾父等ハゴザン、ハラン、レゼフおよびテラサルのエデンの人々等を滅ぼせしがその國々の神これと救ひたりしや　十三ハマテの王アルパデの王セパルワイムの邑およびヘナとアワの王等ハ何處にあるや　十四ヒゼキヤ使者の手より書を受てこれを讀みエホバの家にのぼりゆきてエホバの前にこれを展開げ　十五而してヒゼキヤ、エホバの前に祈

りて言けるはケルビムの間にいますイスラエルの神エホバよ世の國々の中において只汝のみ神にますなり汝は天地を造りたまひし者にいます十六エホバよ耳を傾けて聞たまへエホバよ目を開きて見たまへセナケリブが活る神を謗りにおくれる言語を聞たまへ十七エホバよ誠にアッスリアの王等は諸の民とその國々を滅し十八又その神々を火になげいれたり其等は神にあらず人の手の作れる者にして木石たればこれを滅せしなり十九今吾れらの神エホバよ願くは我らとかれの手より拯ひいだしたまへ然ば世の國々皆汝エホバのみ神にいますことを知にいたらん二十茲にアモツの子イザヤ、ヒゼキヤに言つかはしけるはイスラエルの神エホバかく言たまふ汝がセナケリブの事につきて我に祈るところの事は我これを聽り二十一エホバがかれの事につきて言ふところの言語は是のごとし云く處女なる女子シオンは汝を藐視し汝を嘲る、女子エルサレムは汝にむかひて頭を搖る二十二汝誰を謗りかつ罵詈しや汝誰にむかひて聲をあげしや汝はイスラエルの聖者にむかひて汝の目を高く擧たるなり二十三汝使者をもて主を謗て言ふ我夥多き兵車をひきゐて山々の巓にのぼりレバノンの奥にいたり長高き檜樹と美しき柊樹を斫たふす我その境の休息所にいたりその園の林にいたる二十四我は外國の地をほりて水を飲む我い足の跖をもてエジプトの河々をことごとくふみ涸すなり二十五汝聞ずや昔われ之を作し古時よりわれ之を定めたり今われ之をおこなふ即ち堅き邑々は汝のために坵墟となるなり二十六是をもてそれらの中にすむ民は力弱かりし懼れかつ驚くなり彼等は野の草のごとく青菜のごとく屋蓋の草のごとし枯る苗のごとし二十七汝の止るとの出るとの入と汝の我にむかひて怒くるふとは我の知ところなり二十八汝の怒くるふ事と汝の傲慢ところの事上りてわが耳にいりた

れば我圏と汝の鼻につけ轡と汝の唇にはどこして汝を元來し道へひきうへすべし二九是は汝にあたふる徴なり即ち一年い穂と食ひ第二年にい又その穂を食ふあらん第三年にい汝ら稼ことをし穡ことをし又葡萄園をつくりてその果を食ふべし三十ユダの家の逃れて遺れる者い復根を下に張り實と上に結ばん三一即ち殘餘者エルサレムより出で逃避たる者シオン山より出きたらんエホバの熱心これを爲べし三二故にエホバアッスリアの王の事をかく言たまふ彼い此邑に入じ亦これに矢を發つことあらず楯を之にむかひて堅ることあらず亦壘ときづきてこれを攻ることあらじ三三彼いろの來し路より歸らん此邑にいることあらじエホバこれを言ふ三四我わが身のため又ヒが僕ダビデのためにこの邑を守りてこれを救ふべし○三五その夜エホバの使者いでゝアッスリア人の陣營の者十八萬五千人を擊ころせり朝早く起いでゝ見るに皆死て屍となりをる三六アッスリアの王セナケリブすないち起いで歸りゆきてニネベに居しが三七その神ニスロクの家にありて禮拜をなしをる時にその子アデランメレンとシヤレゼル劍ともてこれを殺せり而して彼等いアラテの地に逃ゆけり是においてその子エサルハドンこれに代りて王となれり

第二十章

一當時ヒゼキヤ病て死なんとせしことありアモツの子預言者イザヤ彼の許にいたりて之にいひけるいエホバかく言たまふ汝家の人に遺命をなせ汝い死ん生ることを得じとニ是においてヒゼキヤその面を壁にむけてエホバに祈り三嗚呼エホバよ願くは我が眞實と一心をもて汝の前にあゆみ汝の目に適ふことを行ひしを記憶たまへと言て痛く泣り四かくてイザヤ未だ中の邑を出はなれざる間にエホバの言これに臨みて言ふ五汝還りてわが民の君ヒゼキヤに告よ汝の父ダビデの神エホバかく言ふ我

汝の祈禱を聽り汝の涙を看たり然ば汝を愈すべし第三日にい汝
ヱホバの家に入んか我汝の齡を十五年增べし我汝とこの邑とを
アッスリアの王の手より救ひ我名のため又わが僕ダビデのため
にこの邑を守らんとヒ是に於てイザヤ乾無花果の團塊壹箇を持
きたれと言ければすなわち之を持きたりてその腫物に貼たれば
ヒゼキヤ愈ぬハヒゼキヤ、イザヤに言けるはヱホバが我を愈した
まふ事と第三日に我がヱホバの家にのぼりゆく事とにつきては
何の徵あるやヘイザヤ言けるはヱホバがその言しところを爲た
まいん事につきては汝ヱホバよりこの徵を得ん日影進めること
十度なり若日影十度退かば何如ナヒゼキヤ答へけるは日影の十
度進むは易き事なり然せざれ日影を十度去りぞかしめよ十一是に
おいて預言者イザヤ、ヱホバに願はりければアハズの日晷の上に
進みし日影を十度しりぞかしめたまへり○十二その頃バラダンの

子なるバビロンの王メロダクバラダン書および禮物をヒゼキヤ
におくれり是はヒゼキヤの疾をるを聞たればなり十三ヒゼキヤこ
れがために喜びその寶物の庫金銀香物貴き膏および武器庫なら
びにその府庫にあるところの一切の物を之に見せたりその家に
ある物もその國の中にある物も何一箇としてヒゼキヤが彼等に
見せざる者はなかりき十四茲に預言者イザヤ、ヒゼキヤ王のもとに
來りてこれに言けるは夫の人々は何と言ふや何處より來りしや
ヒゼキヤ言けるは彼等は遠き國より即ちバビロンより來れり十五
イザヤ言ふ彼等は汝の家にて何と見しやヒゼキヤ答へて云ふ吾
家にある物は皆かれら之と見たり我庫の中には我がかれに見せ
ざる者なきなり十六イザヤすなわちヒゼキヤに言けるは汝ヱホバ
の言を聞け十七ヱホバ言たまふ視よ日いたる凡て汝の家にある物
および汝の先祖等が今日までに積蓄へたる物はバビロンに攜ゆ

かれん遺る者なかるべし十八汝の身より出る汝の生んところの子等の中を彼等攜へ去ん其等はバビロンの王の殿において宦吏となるべし十九ヒゼキヤ、イザヤに言ふ汝が語れるエホバの言は善し又いふ若わが世にある間に太平と眞實とあらば善にあらずや二十ヒゼキヤのその餘の行爲その能およびその池塘と水道を作りて水を邑にひきし事ハユダの王の歷代志の書にしるさるゝにあらずや二十一ヒゼキヤろの先祖等とゝもに寢りてその子マナセこれに代りて王となれり

第二十一章

一マナセ十二歳にして王となり五十五年の間エルサレムにて世を治めたりその母の名はヘフジバといふ二マナセハエホバの目の前に惡をなしエホバがイスラエルの子孫の前より逐いらひたまひし國々の人がなすところの憎むべき事に傚へり三彼はその父ヒゼキヤが毀ちたる崇邱を改め築き又イスラエルの王アハブのなせしごとくバアルのために祭壇を築きアシラ像を作り且天の衆群を拜みてこれに事へ四またエホバの家の中に數箇の祭壇を築けり是ハエホバがこれをさして我わが名をエルサレムにおかんと言たまひし家なり五彼エホバの家の二の庭に祭壇を築きまたその子に火の中を通らしめ占卜をなし魔術をおこなひ口寄者と卜筮師と取もちひエホバの目の前に衆多の惡を爲てその震怒を惹おこせり七彼ハその作りしアシラの銅像を殿にたてたりエホバこの殿につきてダビデとその子ソロモンに言たまひしことあり云く我この家と我がイスラエルの諸の支派の中より選みたるエルサレムとに吾名を永久におかんハ彼等もし我が凡てこれに命せし事わが僕モーセがこれに命せし一切の律法を謹みて行はゝ我これが足をしてわがその先祖等に與へし地より重てさまよひ出ることなからしむべしとル然るに彼等ハ

聽ことをせざりきマナセが人々を誘ひて惡をなせしことヨホバがイスラエルの子孫の前に滅したまひし國々の人よりも甚だしかりきヰ是においてヨホバその僕なる預言者等をもて語て言給いくヰ一ユダの王マナセこれらの憎むべき事を行ひその前にありしアモリ人の凡て爲しところにも踰たる惡となし亦ユダをしてその偶像をもて罪を犯させたればヰ二イスラエルの神ヨホバかく言ふ視よ我エルサレムとユダに災害をくだす是を聞く者はその耳ふたつながら鳴ん ヰ三 我サマリアと量りし繩とアハブの家にもちひし準繩とエルサレムにはどこ一人が皿を拭ひこれを拭ひて反覆がごとくにエルサレムを拭ひさらんヰ四我わが產業の民の殘餘を棄てこれをその敵の手に付さん彼等はその諸の敵の擄掠にあひ掠奪にあふべしヰ五是は彼等その先祖等がエジプトより出し日より今日にいたるまで吾目の前に惡をおこなひて我を怒らするが故なりヰ六マナセはヨホバの目の前に惡をおこなひてユダに罪を犯させたる上にまた無辜者の血を多く流してエルサレムのこの極よりかの極にまで盈せりヰ七マナセのその餘の行爲とその凡て爲たる事およびその犯したる罪はユダの王の歷代志の書に云るさるゝにあらずやヰ八マナセその先祖等とゝもに寢りてその家の園すなわちウザの園に葬られその子アモンこれに代りて王となれり○ヰ九アモンは王となれる時二十二歲にしてエルサレムにおいて二年世を治めたりその母はヨテバのハルツの女にしてその名をメシユレメテと云ふヰ十アモンもその父マナセのなせしごとくヨホバの目の前に惡をなせヰ十一すなわち彼は凡てその父のあゆみし道にあゆみその父の事へし偶像に事へてこれを拜みヰ十二その先祖等の神ヨホバを棄てヨホバの道にあゆまざりきヰ十三茲にアモンの臣僕等黨をむすびて王とその家に弑したりしが國

の民そのアモン王に敵して黨をむすびし者とことく擊ころせり而して國の民アモンの子ヨシアを王となしてそれに代らしむ二五アモンのなしたるその餘の行爲ハユダの王の歷代志の書に去るさるゝにあらずや二六アモンハウザの園にてその墓に葬られその子ヨシアこれに代りて王となれり

第二十二章

一ヨシアハ八歳にして王となりエルサレムにおいて三十一年世を治めたり其母ハボツカテのアダヤの女に去て名をエデダと曰ふ二ヨシアハエホバの目に適ふ事をなしその父ダビデの道にあゆみて右にも左にも轉らざりき三ヨシア王の十八年に王メシユラムの子アザリヤの子なる書記官シヤパンをエホバの家に遣せり即ちこれに言けらく四汝祭司の長ヒルキヤの許にのぼり行てエホバの家にいりし銀すなハち門守が民よりあつめし者と彼に計算しめ五工事を司どるエホバの家の監督者の手に

これを付さ去め而してまた彼らとしてエホバの家にありて工事となすところの者にこれを付さしめ殿の破壞を修理はしめよ六即ち工匠と建築者と石工にこれを付さしめ又これをもて殿を修理ふ材木と砍石を買しむべしセ但し彼らハ誠實に事をなせば彼らの手にわたすところの銀の計算をかれらとするには及ばざるなり八時に祭司の長ヒルキヤ書記官シヤパンに言けるは我エホバの家において律法の書を見いだせりとヒルキヤすなハちその書をシヤパンにわたしたれば彼これを讀りかくて書記官シヤパン王の許にいたり王に返事をして言ふ僕等殿にありし金を打あけてこれを工事を司どるエホバの家の監督者の手に付せりと十書記官シヤパンまた王につげて祭司ヒルキヤ我に一書を見たせりと言ひシヤパン其を王の前に讀けるに十一王その律法の書の言を聞やその衣を裂り十二而して王祭司ヒルキヤとシヤパンの

子アヒカムとミカヤの子アクボルと書記官シヤパンと王の内臣アサヤとに命じて言ふ十三汝等往てこの見當り書の言につきて我のため民のためユダ全國のためにエホバに問へ其は我等の先祖等はこの書の言に聽ざたがひてその凡て我等のために記されたるところを行ふことをせざりしに因てエホバの我等にむかひて怒を發したまふこと甚だしかるべければなり十四是において祭司ヒルキヤ、アヒカム、アクボル、シヤパンおよびアサヤ等シヤルムの妻なる女預言者ホルダの許にいたれりシヤルムはハルハスの子なるテクワの子にして衣裝の室を守る者なり時にホルダはエルサレムの下邑に住をる彼等すなわちホルダに物語せしかば十五ホルダかれらに言けるわイスラエルの神エホバかく言たまふ汝等を我につかわせる人に告よ十六エホバかく言ふ我ユダの王が讀たるかの書の一切の言に依たがひて災害をこの處と此にすめる民に降さんとす十七彼等われと棄て他の神に香を焚きその手に作れる諸の物ともて我を怒らするなり是故に我この處にむかひて怒の火を發す是は滅ざるべし十八但し汝等をつかはして我に問ふむるユダの王には汝等かく言べし汝が聞る言につきてイスラエルの神エホバかく言たまふ十九汝わが此處と此にすめる民にむかひて是わ荒地となり呪詛とならんと言しを聞たる時に心柔にしてエホバの前に身を卑し衣を裂て吾前に泣たれば我もまた聽ことをなすなりエホバこれと言ふ二十然れば視よ我なんぢを汝の先祖等に歸せ去めん汝わ安然に墓に歸することをうべし汝わが此處にくだす諸の災害を目に見ることわらじと彼等すなわち王に返事まとしぬ

第二十三章

一是において王人をつかはしてユダとエルサレムの長老をことごとく集めニ而して王エホバの家にのぼれりユダの

諸の人々エルサレムの一切の民および祭司預言者ならびに大小の民みな之に去たがふ王すなわちエホバの家に見あたりし契約の書の言とことくかれらの耳に讀きかせ三而して王高座の上に立てエホバの前に契約となしエホバに去たがひて歩み心をつくし精神をつくしてその誡命と律法と法度と守り此書に去るされたる此契約の言をおこなわんと言り民みなその契約に加はりぬ四かくして王祭司の長ヒルキヤとその下にたつところの祭司等および門守等に命じてエホバの家よりしてバアルとアシラと天の衆群とのために作りたる諸の器を執いださしめエルサレムの外にてキデロンの野にこれを焼きその灰をベテルに持ゆかしめ五又ユダの王等が立てユダの邑々とエルサレムの四圍なる崇邱に香をたかゝめたる祭司等を廢しまたバアルと日月星宿と天の衆群とに香を焚く者等をも廢せり六彼またエホバの家よりアシラ像ととりいだしエルサレムの外に持ゆきてキデロン川にいたりキデロン川においてこれを焼きこれを打碎きて粉となしその粉を民の墓に散しセまたエホバの家の旁にある男娼の家を毀てり其處はまた婦人がアシラのために天幕を織ところなりき八彼またユダの邑々より祭司をことくく召よせまた祭司が香をたきたる崇邱をばゲバよりベエルシバまでこれを汚しまた門にある崇邱を毀てり是等の崇邱は一は邑の宰ヨシユアの門の入口にあり一は邑の門にありて之に入る人の左にあたるヵ崇邱の祭司等はエルサレムにおいてエホバの壇にのぼることとせざりき但し彼等はその兄弟の中にありて無酵パンを食へり十王また人がその子息息女に火の中を通らしめて之をモロクにさゝぐることなからんためにベンヒンノムの谷にあるトペテを汚しまたユダの王等が日のためにさゝげてエホバの家の門における

馬をうつせりこの馬はパルリムにある侍從ナタンメレクの室にとりしなり彼また日の車と皆火に焚り十二またユダの王等がアハズの樓の屋背につくりたる祭壇とマナセがヨホバの家の兩の庭につくりたる祭壇とは王これを毀ちこれと其處より取くづしてその碎片をキデロン川になげ捨たり十三またイスラエルの王ソロモンが昔シドン人の憎むべき者なるアシタロテとモアブ人の憎むべき者なるケモシとアンモンの子孫の憎むべき者なるモロクのためにエルサレムの前において殲滅山の右に築きたる崇邱も王これを汚去十四また諸の像をうち碎きアシラ像ときりたふし人骨をもてその處々に充せり十五またベテルにある壇かのイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラベアムが造りし崇邱すなわちその壇もその崇邱をも彼これを毀ちその崇邱を焚てこれを粉にうち碎きかつアシラ像を焚り十六茲にヨシア身をめぐらして山に墓のあるを見人をやりてその墓より骨をとりきたらしめ之をその壇の上に焚てそれを汚せり即ち神の人が宣たるヱホバの言のごとし昔神の人この言語を宣ーことありしなり十七ヨシアまた其處に見ゆる碑は何になるやと言しに邑の人々これに告て其は汝がベテルの壇にむかひて爲るこの事等をユダより來りて宣たる神の人の墓なりと言ければ十八すなわち其には手をつくるなかれ誰もその骨を移すなかれと言り是をもてその骨とサマリアより來りし預言者の骨には手をつけざりき十九またイスラエルの王等がサマリアの邑々に造りてヱホバを怒せし崇邱の家も皆ヨシアこれを取のぞき凡てそのベテルになせしごとくに之に事をなせり二十彼また其處にある崇邱の祭司等を壇の上にころし人の骨を壇の上に焚てエルサレムに歸りぬ二十一而して王一切の民に命じて言ふ汝らこの契約の書に記されたるごとくに汝らの神ヱホバに

逾越の節を執行ふべしと三士師のイスラエルを治めし日より已
來もまたユダの王等とイスラエルの王等の代にも斯のごとき逾
越の節を守りしことなかりき三ヨシア王の十八年にいたり
てエルサレムにて斯逾越節をエホバに守りき二四ヨシアまた
祭司ヒルキヤがエホバの家にて見いだせし書に記されたる律法
の言を世におこなんために口寄者と卜筮師とテラピムと偶像
およびユダの地とエルサレムに見ゆる諸の憎むべき者を取のぞ
けり二五ヨシアのごとくに心をつくし精神をつくし力をつくして
モーセの法に全く法たがひてエホバに歸向せし王はヨシアの先
にはあらざりきまたかれの後にも彼のごとき者はなし二六斯、有し
かどもエホバはユダにむかひて怒を發したるその大いなる燃た
つ震怒を息ることをしたまわざりき是はマナセ諸の憤らしき事
をもてエホバを怒らせしによるなり二七エホバすなはち言たまい

く我イスラエルを移せし如くにユダをもわが目の前より拂ひ移
し我が選みし此エルサレムの邑と吾名をそこに置んといひしこ
の殿とを棄べしと二八ヨシアのその餘の行爲とその凡て爲たる事
はユダの王の歷代志の書に法るさるゝにあらずや二九ヨシアの代
にエジプトの王パロネコアッスリアの王と戰はんとてユフラテ
河をさして上り來しがヨシア王これを防がんとて進みゆきけれ
ば彼これに出あひてメギドンにこれを殺せり三十その僕等すなわ
ちこれが死骸を車にのせてメギドンよりエルサレムに持ゆきこ
れをその墓に葬れり國の民こゝに於てヨシアの子エホアハズを
取りこれに膏をそゝぎて王となしてろの父にかはらしめたり三一
エホアハズわ王となれる時二十三歳にしてエルサレムにて三月
世を治めたりその母わリブナのエレミヤの女にして名をハムタ
ルと云ふ三二エホアハズわろの先祖等が凡てなしたるごとくにエ

ホバの目の前に惡をなせーが三三パロチコ彼をハマテの地のリブラに繫ぎおきてエルサレムにおいて王となりをることを得ざらしめ且銀百タランツト金一タランツトの罰金を國に課したり三四而してパロチコヨシアの子エリアキムをーてその父ヨシアにかわりて王とならしめ彼の名をエホヤキムと改めエホアハズを曳て去ぬエホアハズハエジプトにいたりて其處に死り三五エホヤキムハ金銀をパロにおくれり即ち彼國に課ーてパロの命のまゝに金を出さしめ國の民各人に割つけて金銀を征取りてこれをパロチコにおくれり三六エホヤキムハ二十五歲にして王となりエルサレムにおいて十一年世を治めたりその母ハルマのペダヤの女にして名をゼブタと云ふ三七エホヤキムハその先祖等が凡てなしたるごとくにエホバの目の前に惡をなせり

第二十四章

一エホヤキムの代にバビロンの王ネブカデネザル上

り來りければエホヤキムこれに臣服ーて三年をへたりしが遂にひるがへりて之に叛けり二エホバカルデアの軍兵スリアの軍兵モアブの軍兵アンモンの軍兵をしてエホヤキムの所に攻きたら去めたまへり即ちユダを滅さんがためにこれをユダに遣はしたまふエホバがその僕なる預言者等によりて言たまひ去言語のごと去三この事は全くエホバの命によりてユダにのぞみし者にてユダをエホバの目の前より排び除かんがためなりき是はマナセがその凡てなす所において罪を犯ーたるにより四また無辜人の血をながー無辜人の血をエルサレムに充したるによりてなりエホバはその罪を赦すことをなしたまはざりき五エホヤキムのその餘の行爲とその凡て爲たる事はユダの王の歷代志の書に去るゝにあらずや六エホヤキムその先祖等とゝもに寢りその子エコニヤこれに代りて王となれりヒ却説またエジプトの王は重

てその國より出きたらざりき其はバビロンの王エジプトの河よりユフラテ河まで凡てエジプトの王に屬する者を悉く取たればなりハエコニヤは王となれる時十八歳にしてエルサレムにて三月世を治めたりその母はエルサレムのエルナタンの女にして名をヒホジタと云ふルエコニヤはその父の凡てなしたるごとくにエホバの目の前に惡をなせりその頃バビロンの王ネブカデネザルの臣エルサレムに攻のぼりて邑を圍めり十一即ちバビロンの王ネブカデネザル邑に攻來りてその臣にこれを攻惱さしめたればユダの王エコニヤその母その臣その牧伯等およびその侍從等と丶もに出てバビロンの王に降れりバビロンの王すなわち彼を執ふ是はその代の八年にあたれり十三而して彼エホバの家の諸の寶物および王の家の寶物を其處より携へ去りイスラエルの王ソロモンがエホバの宮に造りたる諸の金の器を切はがせりエホバの言たまひしごとし十四彼またエルサレムの一切の民および一切の牧伯等と一切の大なる能力ある者ならびに工匠と鍛冶とを一萬人携へゆけり遺れる者は國の民の賤き者のみなりき十五彼すなわちエコニヤをバビロンに携ゆきまた王の母王の妻等および侍從と國の中の能力ある者をもエルサレムよりバビロンに携へうつせり十六凡て能力ある者七千人工匠と鍛冶一千人ならびに强壯して善戰ふ者是等をバビロンの王携へてバビロンにうつせり十七而してバビロンの王またエコニヤの父の兄弟マッタニヤを王となしてエコニヤに代へ其が名をゼデキヤと改めたり十八ゼデキヤハ二十一歳にして王となりエルサレムにて十一年世を治めたりその母ハリブナのエレミヤの女にして名をハムタルと曰ふ十九ゼデキヤハエホヤキムが凡てなしたるごとくにエホバの目の前に惡をなせり二十エルサレムとユダに斯る事ありしハエホバの震

怒による者にしてエホバつひにその人々を自己の前よりはらひ棄たまへり偖またゼデキヤハバビロンの王に叛けり

第二十五章

一　茲にゼデキヤの代の九年の十月十日にバビロンの王ネブカデネザルその諸軍勢を率てエルサレムに攻きたりこれにむかひて陣を張り周圍に雲梯を建てこれを攻たりニかくこの邑攻かこまれてゼデキヤ王の十一年にまでおよびしが三その四月九日にいたりて城邑の中饑こと甚だしくなりその地の民食物を得ざりき四是をもて城邑つひに打破られければ兵卒ハみな王の園の邊なる二箇の石垣の間の途より夜の中に逃いで皆平地の途にしたがひておちゆけり時にカルデヤ人ハ城邑を圍みをる五茲にカルデヤ人の軍勢王を追ゆきエリコの平地にてこれに追つきけるにその軍勢みな彼を離れて散しかばカルデヤ人王を執へてこれをリブラにをるバビロンの王の許に曳ゆきてその罪をさだめセゼデキヤの子等をゼデキヤの目の前に殺しゼデキヤの目を抉りこれを銅索につなぎてバビロンにたづさへゆけりバビロンの王ネブカデネザルの代の十九年の五月七日にバビロンの王の臣侍衛の長ネブザラダンエルサレムにきたりルエホバの室と王の室を焼き火をもてエルサレムのすべての室と一切の大なる室を焼りヽまた侍衛の長と丶キにありしカルデヤ人の軍勢エルサレムの四周の石垣を毀てり十一侍衛の長ネブザラダンすなハち邑に遺されし殘餘の民およびバビロンの王に降りし降人と群衆の殘餘者を擄へうつせり十二但し侍衛の長その地の或貧者をのこして葡萄をつくる者となし農夫となせり十三カルデヤ人またエホバの家の銅の柱と洗盤の臺と銅の海をくだきてその銅をバビロンに運び十四また鍋と火鏟と燈剪と匙および凡て役事に用ふる銅の器と取り十五侍衛の長また火盤と鉢など金銀にて作れる物

と取り十六またソロモンがエホバの室に造りしところの二の柱と一の海と臺とを取り此もろ〳〵の銅の重い量るべからず十七この柱い高さ十八キュビトにしてその上に銅の頂ありその頂の高い三キュビトその頂の四周に網子と石榴とありて皆銅なり他の柱とその網子もこれに同じ十九侍衛の長は祭司の長セラヤと第二の祭司ゼパニヤと三人の門守を執へ二十また兵卒を督どる一人の寺人と王の前にはべる者の中邑にて遇えるところの者五人とその地の民を募る軍勢の長なる書記官と城邑の中にて遇しところの六十人の者を邑より擄へされり二十一侍衛の長チブザラダンこれらを執へてリブラにをるバビロンの王の許にいたりければ二十二バビロンの王ハマテの地のリブラにてこれらを擊殺せりかくユダはおのれの地よりとらへ移されたり二十三かくてバビロンの王チブカデザルい自己が遺してユダの地に止らしめし民の上にシャパンの子なるアヒカムの子ゲダリヤをたてゝこれをその督者となせり二十四茲に軍勢の長等およびこれに屬する人々みなバビロンの王がゲダリヤを督者となせしことを聞しかばすなわちチタニヤの子イシマエル、カレヤの子ヨハナン、子トパ人タンホメテの子セラヤおよび或マアカ人の子ヤザニヤならびに彼らに屬する人々ミツパにきたりてゲダリヤの許にいたれり二十五ゲダリヤすなわち彼等とかれらに屬する人々に誓ひてこれに言けるは汝等カルデヤ人の僕となることを恐るゝなかれこの地に住てバビロンの王につかへなば汝等幸福ならんと二十六然るに七月に王の血統なるエリシヤマの子チタニヤの子なるイシマエル十人の者とともに來りてゲダリヤを擊ころし又彼とともにミツパにをりしユダヤ人とカルデヤ人を殺せり二十七是において大小の民および軍勢の長等みな起てエジプトにおもむけり是はカルデヤ人をおそれたればな

り二七ユダの王エホヤキムがとらへ移れたる後三十七年の十二月二十七日バビロンの王エビルメロダクその代の一年にユダの王エホヤキムを獄より出してその首をあげ玄め二八善言をもて彼をなぐさめその位をバビロンにともに居るところの王等の位よりも高くし二九その獄の衣服を易玄めたりエホヤキムは一生のあひだつねに王の前に食をなせり三十かれ一生のあひだたえず日々の分を王よりたまはりてその食物となせり

95-91123

DEC 20 1947